1994
2024

30

【FSC30年のあゆみ】

30 Years of FSC: Driving Sustainable Impact in Japan and Beyond

30 Years of FSC®

ご挨拶

Greetings

FSCのグローバルな30年の歩みと FSCジャパンの貢献

キム・カールステンセン
FSC国際事務局　特使、前事務局長

FSCが責任ある森林管理を促進し、「Forest For All Forever（みんなの森をいつまでも）」のスローガン通り、すべての生物のために持続可能な森林を実現するというグローバルな旅を始めてから、今年で30周年を迎えます。この間、FSCは世界中の森林が人類社会に必要不可欠な製品とサービスを提供できるよう尽力してきました。この節目を祝うにあたり、FSCの日本市場への進出成功以来、私たちと共に歩んできたFSCジャパンとその献身的なパートナーの皆様の重要な役割に改めて敬意を表します。

私たちは共に、持続可能な森林管理と森林資源の責任ある調達を推進し、世界的な舞台で強力な模範となってきました。FSCは世界で最も認知され、評価される森林認証システムへと成長しましたが、日本の揺るぎない取り組みは私たち全体の進歩を強く支えてきてくれました。森林資源の保全と持続可能な消費の促進という私たちの使命をより強固なものにし続けてくれる、強力なパートナーシップに感謝いたします。

気候変動、生物多様性の損失、社会的不公正といった現在進行形の大きな課題に直面する中、FSCジャパンとそのパートナーの協力と決意は、すべての人のためにより良い未来を目指し、前進し続けるための勇気を与え続けてくれます。この結束は、持続可能な実践を通じて、森林の繁栄と地域社会の発展という、私たちの未来へのビジョンをより確かなものにします。

この節目を祝うにあたり、FSCジャパン、その会員、スタッフ、そしてすべてのパートナーの皆様に心からの感謝を申し上げます。個人的にも、日本や世界各地で出会った日本の同僚や会員の皆様との交流はいつも喜びでした。責任ある森林管理を推進し、森林に依存する地域社会を支援する私たちの共同の取り組みは、日本、アジア太平洋地域、そして世界におけるFSCのレガシーの強固な基盤となりました。日本が今後も未来の世代のために森林を大切に守り、私たちの旅の原動力であり続けることを確信しています。

祝辞

FSC設立30周年に寄せて

林野庁長官　青山豊久氏

FSCの設立30周年心よりお祝い申し上げます。

森林には、生物多様性保全、二酸化炭素の吸収・固定、国土保全、木材供給といった様々な機能があります。これらの機能は複合的に絡み合い、相互にトレードオフ関係にもあり、これらの機能を総合的かつ高度に発揮できるよう経営していくことが求められています。

また、森林はあくまで自然環境の構成要素ですから、その経営は、所在する地域の特性や長期の時間軸を意識しながら、順応的に行っていかざるを得ません。

こうした森林の機能の多様さ、地域性、時間軸の長期性などが、森林経営を難しくしていると考えます。こうした森林経営の難しさに対して、一定の物差しを与え持続可能なものにしていく貴重なツールが森林認証であると考えます。

今日、地球温暖化防止や生物多様性保全に果たす森林や木材の役割は、国際的にも国内的にもますます重要になっています。林野庁では本年３月に「森林の生物多様性を高めるための林業経営の指針」、「建築物への木材利用に係る評価ガイダンス」をそれぞれとりまとめ公表しました。これらは、持続可能な森林経営と木材利用を進めようとする林業経営者や建築事業者の経営の指針になるものであり、森林認証制度とも親和性の高いものと考えます。

貴協議会の活動がますます活発となり、今後さらに発展されることを心より祈念いたします。

ネイチャーポジティブの実現とFSCの役割

環境省自然環境局長　植田明浩氏

FSC創設30周年、誠におめでとうございます。

FSC におかれては、適切な森林管理や木材製品の評価、認定等を行ない、持続可能な自然資源の調達に関して、大きな貢献を遂げてこられました。様々な森林認証制度の中でもFSC 認証制度は代表的なものであり、森林の持つ生態系サービスの維持や生物多様性の保全等に大きな貢献をされているものと考えております。

環境省でも、2030 年までの新たな世界目標「昆明・モントリオール生物多様性枠組」を踏まえ、陸と海の30%以上を保全する「30by30」を含め、生物多様性の損失を止め反転させるネイチャーポジティブの実現に向け、自然共生サイトの取組を開始しました。また、自然共生サイトの仕組みを踏まえた「生物多様性増進活動促進法」も成立しました。この法律では、企業等の生物多様性増進活動を国が認定することで、その価値や信頼性を客観的に担保し、活動の促進を図ることを狙いとしています。このような取組は、森林等の自然の価値と民間企業等による保全努力を可視化する点で、FSC認証に通じる面もあると考えています。また、国内企業においても森林破壊の防止や生物多様性に配慮したサプライチェーンの構築等が求められており、FSC認証を始めとする森林認証制度は一層重要となります。

FSC におかれましては、ネイチャーポジティブの実現に向けて、その活動が今後、国内外で益々広がっていくことを願っています。

特別寄稿

FSCの胎動期 ―FSC30周年に寄せて―

FSC国際事務局　初代事務局長　ティモシー・シノット

FSC が 30 周年を迎えた。この記念の時を、FSC がなぜ、どのようにして誕生したのかを振り返り、今後どこに向かっていくのかを考える機会としたい。

トロントでの大きな会議が「設立総会」と呼ばれたため、一般的には FSC は 1994 年に設立されたと記録されている。しかし実際にはこの時、FSC には資金も事務所もスタッフも法的地位もなかった。設立総会は、非公式な暫定理事会に森林認証制度として組織を設立することについて参加者から賛同を得ること、その地位や原則と基準の草案について話し合うことを目的としていた。これは、多くの国々における幅広い利害関係者と何年も議論を重ね、国際的な基準、独立した認証機関、認定制度を備えた認証システムが必要だという結論に達してのことであった。

なぜこれほどまでに時間がかかったのか、そして、どのようにしてこの結論に達したのか？既に、長年にわたり、環境および社会保護団体は、熱帯、温帯、寒帯を問わず、世界各地における森林の破壊と劣化について訴えていた。映画やテレビ、新聞もこれらの懸念を取り上げていた。1960 年代から、人々は森林の状況が悪化していること、そして政府や林業関係者が伐採や農業の拡大による影響を黙認していることに徐々に気づいていった。しかし、一般市民や有力な NGO による木材業界や政府への批判では、ほぼ効果はないように見えた。

1980 年代後半、一部の NGO は別の戦術を試みた。それは、木製品を販売する小売業者に圧力をかけるというものだった。当時のスキャンダルのひとつに、ブラジルのアマゾン先住民族保護区におけるマホガニーの違法伐採があった。ある日、ロンドンで、グリーンピースのチームはブラジル人コミュニティの代表者らとともに伝統衣装に身を包み、有名な Harrods の店舗に進入し、マホガニー製のテーブルや椅子を押収した。勿論テレビの取材陣やジャーナリストもそこにはいた。あまりの状況に、警備員はほぼ何もできなかった。そして翌日、それはテレビで放映されたのだった。

また別の日には、普段通り大勢の買い物客で賑わうはずの大型スーパーマーケットでグリーンピースが駐車場を占拠した。そしてその店には紙や段ボール、キッチン用品やその他の木製品が溢れているが、経営陣はそれらの木材がどこから来たのか全く知らなかったと抗議を始めたのである。

更に大手チェーン店 B&Q の本社で、ある記者が環境担当責任者にインタビューした。「これらの木材はどこから来たのか」という質問に、彼は正直にわからないと答えた。そこで記者は「なるほど、知らないということは、気にしていないということですね」と言い、ノートに書き留めた。責任者は、これは顧客や株主に対して伝えたいメッセージではないと気づき、解決策を模索し始めたのだった。

こうした出来事が引き金となり、大企業は同じ質問を自問するようになった。木材はどこから来ているのか？それは許容できる供給源なのか？それは難問だった。それに答える試みとして、1987 年、Friend of the Earth-UK（FoE, 地球の友）は「良い木材ガイド」の発行を開始した。FoE とグリーンピースは 15 年間にわたりいくつもの国でこのガイドを発行したが、あまり効果は見られなかった。一方で状況は次第に過熱していった。

1988 年、ITTO（国際熱帯木材機関）は加盟各国の森林管理の状況に関して独自の調査を行った。ただし、それは「持続可能な管理」ではなく、「持続的収穫量管理」についてである。私はブラジル、ペルー、エクアドル、ボリビア、リニダード・トバゴの評価を行うよう依頼された。1989 年の報告書は一騒動を巻き起こした。持続的収穫量の規定を満たす総面積は、取るに足らない程しかないとの報告だったのだ。私が適合していると認めた地域は、トリニダード・トバゴの古い森林保護区の一部だけだった。

同年、FoE と私は、熱帯林管理で最も定評のあるマレーシアの森林保護区の管理状況を評価するプロジェクト提案書を ITTO に提出した。英国政府が ITTO に提案書を提出したところ、苛立ち、気分を害した総会により強く否定された。ITTO でのこの経験から、私はこの分野が信頼の危機にあることを確信した。危機は時に変化をもたらす好機となる。そして翌年、変化が始まった。

欧州向けの熱帯木材の小規模輸入業者である Ecological

Trading Company（ETC）のオーナーが、供給元の選定基準を独自に作成することを決意したのである。この情報が WWF-UK と B&Q に届くと、彼らは資金提供を決定した。この知らせは米国にある熱帯雨林保護のための木材労働者同盟（WARP）にも届いた。WARP は熱帯広葉樹を使用する木材労働者の団体であり、自分たちの仕事が熱帯雨林の破壊に寄与しているのではないかと懸念していた。彼らは ETC のマネージャーを会議に招待し、その考えを聞いた。そして、その会議で認証作業部会を設置することが決定されたのだった。

その後はエンジン全開で進んでいった。1991 年はじめから、この作業部会とその他の関係者が、現在の FSC を構成する主要要素を特定した。つまり、Forest Stewardship Council®（森林管理協議会）と呼ばれる組織、利害関係者間の幅広い協議に基づく規格、独立した認証機関、およびその認定である。さらに 2 年間の作業と議論の間に暫定理事会が選出された。SCS とレインフォレスト・アライアンスは、独自の規格に基づく森林認証を開始した。原則と基準の草案は 10 回にわたって回覧された。認定機関を探した結果、FSC 自身が認証機関を認定する必要があることが決定された。また、法的地位と規約に関する議論も行われた。

これらの議論はどれも容易なものではなかった。多くの人々とその利害が関与していた。熱帯林での伐採は一切認証すべきではないと考える人もいた。また、外来種、あるいはあらゆる種類の人工林に反対する人もいた。さらに、営利組織が会員となることに反対する人もいた。更に 2 年を経て、トロントで関係者や組織による大規模な国際会議を開催する時が来た。最終的に、現在の状態と近い会員制組織として進むことに大多数の賛成が得られた。

その後、更に 2 年間をかけて、資金調達、少数のスタッフの雇用、メキシコのオアハカでの国際事務所の開設、法人格の取得、国際規格の完成、認定制度の策定などが行われた。そして 1996 年はじめ、ついに初の認定契約が締結され、世界初の FSC 認証製品が市場に登場した。FSC ロゴ入りの木製ヘラである。（現在はボンの FSC 国際事務局に展示されている）

以上が、FSC 設立の経緯と理由のハイライトである。FSC は市場ベースの取り組みであるとよく言われるが、それは、認証が、木材製品の供給源や責任の程度を示すのに役立つためであり、それはマーケティングや取引において非常に重要な情報であるからだ。しかし同時に FSC はまた、森林ベースの取り組みでもあり、広大な森林域に影響を及ぼしている。FSC の規格の信頼性により、間接的に、世界中の国々の法的要求事項や実際の管理方法が数多く改善されてきた。そして、FSC は世界中の森林管理の改善を目指すという使命を持ち続けている。

予期せぬことではあったが、現在では多くの新しい認証制度が FSC の例に倣い、利害関係者や組織間の幅広い協議に基づき、マルチステークホルダー基準を策定している。このように、FSC は進化を続け、影響を与え続けており、今後もそれは続いていくだろう。

2024年10月

ティモシー・シノット

Dr. ティモシー・シノット

英国オックスフォード大学で林学を修め、ウガンダのマケレレ大学で博士号を取得。熱帯・亜熱帯の 35 か国にて熱帯林に関連する幅広い業務に従事。熱帯林保全についての議論の中心となり、FSC 創設を主導する。1994 ～ 2001 年、FSC の初代事務局長として FSC の基礎を築く。その後も独立コンサルタントとして現在に至るまでメキシコを拠点に様々なプロジェクトに取り組む。

1999 年、メキシコ・オアハカで開催された第 2 回総会で事務局長として話すシノット氏　©FSC International

FSC30年のあゆみ

世界では

FSC設立前

欧米での熱帯木材の不買運動

1980

1990

1993
FSC設立総会
（カナダ/トロント）

26カ国から130人が参加し、FSCの創設が宣言される

1995

1994
FSC設立

FSCが法人として正式に設立。事務局がメキシコのオアハカに置かれる

世界
1998〜1999
認証林面積
1,000万ha

2000

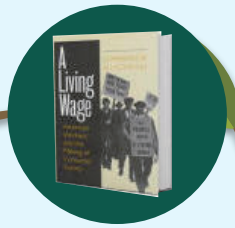
1996
第1回総会
（メキシコ、オアハカ）

- 認証機関との初めての認定契約
- 初めてのFSCラベル付き製品（英国、木製へら）

- 初めての森林管理国内規格（スウェーデン）

1997
- 人工林に関する原則の追加

1999
- 初のFSC認証の本出版



- 初のFSC認証非木材林産物（チューインガム）
- 保護価値の高い森林(HCVF)の概念の導入

日本では

1996
- WWFジャパンがFSCについての紹介を開始

2000
- 国内初のFM認証取得（速水林業）
- 国内初のCoC認証（速水林業の材を扱う木工所と製材業者）
- FSC国内森林管理規格策定に向けて議論が始まる

2001
●日本初の
FSC認証紙の
生産開始（三菱製紙）

2002
WWF山笑会が発足
初期のFSC認証取得者の多くを
集め、FSCの普及啓発活動を行う

2002
●CoC認証におけるグループ認証・
マルチサイト認証の導入

2003
●FSC国際事務局がメキシコのオ
アハカからドイツのボンに移動
●2万のFSC製品が市場に出回る

2004
●小規模森林管理者のための基
準導入
●FSCミックスラベルの登場

2005
●Accreditation Services
International (ASI)が
設立、FSCの認定機関となる
※現在
ASIはAssurance Service
Internationalに名称を変更

ASI created to manage FSC accreditation program.

世界
2003
認証林面積
4,000万ha

2006
●日本森林管理協議会設立

2006
●FSC管理木材規格策定
●国際社会環境認定ラベル表示
連盟（ISEAL）による認定

2007
●日本森林管理協議会が
正式な日本の窓口（FSCジャ
パン）として認められる。
●国内初のプロジェクト
認証（伝統漁船「サバニ
(SAPRO-001646)

世界
2008
認証林面積
1億haに
達する

2010
●FSCフォーラム開催。
●FSC国際理事会を名古屋
で開催
●国内のCOC認証取得者が
1000件を超える

2012
●森林サミット2012開催

2014
●日本における管理木材リス
クアセスメント第1版が承
認される

2015
●FSC原則と基準第5版に基
づく国内規格策定開始
●日本の管理木材セントララ
イズド・リスクアセスメント
が承認される

2012
FSC原則と基準第5版発行

2015
●初の国際標準指標が
承認される

日本
2010
CoC認証取得者
1000件を
超える

日本
2013
認証林面積
40万haを
超える

日本
2020
CoC認証が
2000件を
超える

2016
●地方自治体首長によるFSC
認証材供給応援宣言

2017
●FSCと国内外企業が共同宣言であ
る「SDGsとFSC認証に関するバン
クーバー宣言」を発表

2018
●管理木材リスクアセスメン
トが完成
●初めて日本国内森林管理
規格が完成
●7月、小売企業など7社によ
る「FSC認証材の調達宣言
2020」発表

2020
●CoC認証における中核的労働要
求事項の導入

世界
2021
世界のFSC認証林面積
2億haに
CoC認証取得者
5万社

日本でのFSC草創期

FSCジャパン初代事務局長　前澤英士

■ WWF インターナショナルに就職

大学卒業後、国家公務員や民間企業勤めをしていましたが、中学時代から自然保護への関心がありました。建設省入省から5年ほど後、WWF（世界自然保護基金）インターナショナルのプロジェクト執行者の募集があり、その試験を受け、1990年に採用されました。その後、世界自然保護基金日本委員会（現WWFジャパン）の一員として、日本をベースにした森林担当オフィサーになりました。横浜に事務局を置く国際熱帯木材機関（ITTO）の国際会議が年2回開かれていました。そこで、森林保全についてロビーイングをするなど、政府への働きかけをすることが私の任務でした。

■国際森林認証 FSC の誕生

当時、日本の木材貿易に問題があるのではないか、森林が破壊されている地域から木材を購入しているのではないかとの批判が出ていました。国際機関は熱帯林破壊に対して効果的な措置を取れませんでした。木材関係の企業は熱帯林破壊に手を貸しているという批判を受け、企業ブランドが損なわれてしまいます。効果的な取り組みをしないと商売が成り立たなくなるという危機意識が高まっていきました。林業者と環境保護団体が反発し合うのではなく、一緒に何かできないかと、有志が集まりました。1990年ごろです。国際的な森林認証が作れないかと考え、FSCができました。1993年、FSC設立のための総会がカナダのトロントで開かれ、26カ国から130人が参加しました。1994年、FSCが正式に発足し、メキシコのオアハカに事務局が置かれました。

1996年になって、私に日本でFSC普及に取り組むよう指示がありました。当時、英国の担当者からは「日本の環境意識は欧州に比べて、20～30年遅れている。素地がないところでFSCを広めるには覚悟が要るぞ」と言われました。FSCを紹介するためにしたことは、審査は何をどう見るかを知ってもらうことです。認証機関の審査員を海外から呼び、日本の林業者が経営方針・施業内容等を説明し、認証審査だとどのように評価されるかを聞く。セミナーで概要を知ってもらい、森林現場で模擬審査をしました。自治体が関心を持ってくれたのは幸いでした。

■「いいこと」につながる認証

私はさまざまな研究者、活動家に意見を聞きましたが、「いいものにマークを付けるよりも、悪いものにドクロマークを付ける方が先だ」と言われたこともありました。私もそのように思うところがある反面、「悪いものをやめるよりも、いいことにつながるというほうが人に受け入れやすいし、説明もしやすい」とも考えました。とにもかくにも、日本でFSC普及に取り組むよう指示がありましたので、私が決めた二つの方針のうちの一つは、FM認証を先に取るということです。CoC認証を先に取ると、外国産材の輸入促進だととらえられる可能性もあるため、日本の森林も認証を取れることを示したかった。もう一つは複数の認証機関を誕生させることです。認証機関同士が審査内容や費用について競争し、審査の質を保つ必要があると考えました。それらはありがたいことに、うまく行きました。

そのうちに速水林業さんから認証申請の話が来ました。日本初のことなので、審査をする専門家を海外から一人招くとともに、日本の専門家を入れる必要があり

Mpingo project　©Maezawa

ました。専門家を探すよう認証機関から求められ、林学会の方から紹介を受けるなどして、専門家3人を探しました。「最高の人選だった」と後に言われました。速水林業さんは 2000 年に FSC 認証を日本で初めて取得し、新聞などで紹介され、波及効果をもたらしました。

■山笑会から FSC ジャパンへ

WWF インターナショナルは各国にバイヤーズグループという認証された製品を買うグループを作る活動をしていました。需要を林業者に見せようという目的です。私は購入者だけだと外材輸入促進団体と見られると考え、林業者も入れた組織を作りました。山笑会（さんしょうかい）です。この名前は、俳句の季語「山笑う」から名付けました。春に若葉が揺れ動くのが、山が笑っているように見える、春の季語です。山笑会では会員間での情報交換を行いましたが「FSC 認証を取得しても木材や製品が売れないよ」ともよく言われました（笑）。ストレス発散の場ともなったのではないかと思いますが、交流も深まったかと思います。その後、山笑会と FSC が合体する形をとり、2006 年に特定非営利法人日本森林管理協議会を設立しました。

■ FSC は貧困の撲滅に寄与するツール

FSC は途上国と先進国の両方の利益を反映した、持続可能な森林管理の一つの具体的基準を作ったという点に意義があると思います。森林保護と林業経営の両方の観点から見て、木をどう伐るか、保護するかを議論することができたのは、私にとっても勉強になりました。木質資源を使う方が化石燃料を使うよりも環境保全にとって良いことです。

FSC 認証を取得したところに行って、「取って良かったです」と言われるとうれしくなります。タンザニアの認証例では、NGO が森林経営の支援をしました。楽器の材料となるムピンゴという木の認証を取り、英国の企業がその木を使ってクラリネット等を作りました。経済的に潤い、井戸を掘ったり、学校や助産婦施設を作ることができました。現地の人は「FSC は貧困の撲滅に寄与するツールだ」と言っていました。

やり残したこととしては、海外にもっと発信すべきだったということがあります。ちょっとした記事でもいい。それを読んで新たなお客さんを見つけることができるかもしれない。コミュニケーションが大事だと思います。林業界では FSC のことを知らない人がまだ多い。自分たちで情報を集め、自分たちの森林管理が国際的にみてどういう位置にあるかを確認してほしい。CoC は今後、主流になっていくと思います。誰もが信頼する根拠の明確な認証制度が広がることを願っています。

山笑会で出展した2004年のエコプロダクツ展
©WWF Japan

前澤英士（まえざわ・えいし）

建設省、WWF インターナショナルなどを経て、FSC ジャパン初代事務局長、2023 年に退職。

座談会

日本の林業とFSCのこれまで、そしてこれから

日本における FSC の普及は 2000 年の速水林業による FSC FM 認証の取得に始まります。その当時から現在に至るまで FSC FM 認証を牽引されてきた速水林業の速水亨さん、そして審査員として FM 認証の現場をずっと見てこられた富村周平さん、白石則彦さん（東京大学名誉教授）、および SGS ジャパンの佐々木聡子さんに FSC 草創期からこれまで、そしてこれからの日本の林業と FSC 認証についてお話を伺いました。

■日本の FSC の幕開け

―まずは、日本初となった速水林業の FSC 認証取得ですが、その経緯を教えてください。

速水　私は 1997 年、ISO14000 を森林に適用させるための国際的な会議に参加したのですが、そこで森林の第三者認証が注目されていることに強い印象を受けたのです。出席者の取り扱う木材が世界の木材貿易量の半分以上という会議で、FSC の国際事務局長も来られていました。WWF ジャパンで FSC を紹介していた前澤さんからも連絡をもらい、日本も世界に遅れを取ってはいけない、どうせ認証を取得するなら自分が最初にやろうと思いました。

―当時、誰も認証の経験がない中で、審査をする側も受ける側も大変だったのでは。

速水　簡単な認証機関で取得して、「誰でも取れる認証」という印象になってもいけないので、あえて審査が厳しいと評判の認証機関を選びました。審査前に私とは関係なく、WWF 主催でその認証機関で審査員を務めるロバート・フルベス博士を呼び、3 回講演会を開きました。集まった学者やコンサルタントの中から、ロバートさん、前澤さんが富村さんや白石先生、芝先生を審査員として選んだのです。

白石　フォレスター（森林研究者、森林関係者）でなければ審査はできないという合意はありましたね。

富村　最初に東京で研修があり、それから審査に入りました。速水林業さんとは一線を画すようにしました。それが

国内初となった、速水林業でのFM認証本審査（1999年）

審査をする側、受ける側のけじめですから。

速水　日本初なので、これが今後すべての国内認証の前例となります。最初の 1 ページを開いていくので、きっちりやろうという意識はありましたね。また、当時は世界でも人工林の認証例は少なくて、我々は世界で 6 件目でした。審査の準備も、見本もなく相談する人もいないので、10 の原則と 56 の基準（当時）を読み込み、自分たちの作業がどう当てはまるのか、従業員と徹底的に議論し整理しました。モニタリングとか、日本にはそれまでなかったことが沢山ありました。

富村　実際、審査の中でも、日本の実態と合わない要求事項もあり、どう適用していくか、真剣に話し合いました。

白石　現場審査を終えても、宿で毎日夜中の 2 時ごろまで議論しましたね。審査員それぞれの視点も違いました。

富村　審査もさすがに厳格でしたね。訪問場所を選ぶ際、クライアントに聞くと都合のいい所を選ぶから、選ばせない。地図を広げて、コインを投げて落ちた所に行きました。

―佐々木さんはどのような経緯で森林認証を始められたのですか。

佐々木　私は白石先生の森林経理学研究室にいたのですが、就活中、認証機関の SGS から FSC 認証の話を聞き、興味をもち飛びついたのです。初めての FM 認証審査は、東京農工大学の演習林でした。大学演習林としては日本初で、2001 年に日本で 4 例目の FM 認証となりました。私はまだ見習いで、英国の本部から審査員を呼び、富村さんに専門家として来ていただきました。

■グローバルな視点から見る日本の林業

富村　初期はまだ日本の林業の特徴を踏まえた規格ではなかったので、解釈には苦労しましたね。日本では森林は急峻な山にあるものですが、欧米には平地林が多いため、考え方が違うところが多々ありました。

速水　日本では考えられないようなちょっとした傾斜でも、土壌侵食を防ぐために土地を削って階段状にするとか、驚くような要求事項がありましたね。

佐々木　当社も初期はいつも海外から審査員を招聘していましたが、当時は英国が本部でしたので、英国系の考え方でしたね。やはり日本の林業にどう基準を当てはめるか、富村先生にも教えていただきながら、お客様と一緒に考えました。

白石　日本と海外では、想定している森林や管理方法がかなり違います。人工林も、ブラジルでは早生樹の短伐期ですが、日本の人工林の伐期は 50 年から 80 年です。そうした違いが分かれば、根本的な違いはありません。

速水　サステナビリティとか土壌の維持管理とか、手法は違っていても、根底的な考え方は一緒ですね。間伐をどう考えるかは大きく違いました。オーストラリアや南米では間伐をしない。葉が常にスペースを覆いつくしている方が、バイオマス成長量が大きいから正しいという考えです。間伐は環境に良いと考える日本とは全く違いました。

富村　欧米は天然更新、日本は人工更新が主体という点も違います。人工林は通常、生物多様性の面ではあまり評価が高くないのですが、速水林業では十分な間伐が行われて、下層植生が発達した森林になっており、評価に値するという判断になりました。

速水　外国人審査員は日本のことをわかっていないと煙たがる認証取得者も多いけれど、お金を払ってでも呼ぶ価値はあります。外国人は視点が違うから、思ってもない点を指摘してきて、気づかされることも多いですから。

富村　FSC という物差しにより、海外の林業と比較できるようになったのは大きいです。

速水　確かに。日本の林業をグローバルな視点から、より客観的に見られるようになりました。

■認証における課題

―その後の FSC 認証の発展で課題に感じたことはありますか。

富村　審査員の育成は課題ですね。経験の浅い、専門外の審査員が増えてきています。森林認証の審査員というのは、森林の全ての側面を見なくてはいけない。環境の専門家、社会活動家、林業経営者、すべての視点が必要です。森林関係でもこんなに幅広い知識や経験が求められる仕事はあまりないでしょう。これにはやはり経験、場数がものを言います。

白石　審査員と審査される側の意見が食い違うのはよくあることです。一方的な審査にならないよう、規格では何が求められていて、現場ではそれに対してどのような状態なのか、皆で忌憚なく議論することが審査の質、満足感につ

ながります。

速水　議論は FSC の根幹です。しかし最近は議論ができない審査員や認証取得者が増えてきているのを感じます。審査される側も、唯々諾々と審査員の言うことを受け入れるのではなく、審査員に議論をふっかけるような気骨をもってほしいですね。

白石　私は管理方法が自分の考えと違っていても、とりあえず相手の主張を受け止め、その上で継続的に注視し、検証するように求めます。5年後、10 年後にその答えがわかるように。しかし、その態勢のできていない認証取得者が少なくない。管理方法について、なぜそのようにしたのかを説明できることと、結果を見てそれをフィードバックできることとは表裏一体です。それが FSC の求めるモニタリング、順応的管理でもあります。結果の検証ができるよう、記録をきちんとつけてほしいと思います。

佐々木　モニタリングはコンセプトが難しくて、確かに不適合になることが多い要求事項です。

富村　規格の変化もありますね。最初はパフォーマンスベースだったものが、ISO 型に変わり、審査員も現場を見るよりも文書や記録を求めるようになりました。

白石　規格策定では色々ありましたね。

富村　かなり早くから日本に合った規格を作ろうと奮闘し、草案を8つも重ね、フィールドテストも何回かしましたが、その間に本部で原則と基準が改定されることになり、頓挫してしまいました。規格策定が再開し、最終的に出来上がったのは 2018 年でした。

■ FSC の影響

―FSC による変化や効果を感じることはありますか。

速水　認証にまじめに対峙しているところは、森林管理が主体的になった。補助金中心ではなく、どういう森林をつくりたいのかという意識を皆で共有しながら、そこに補助金を当てはめていく。認証は宿題を買うようなもの。お金を払って叱られるのだから、嫌でも意識は高まります（笑）。

白石　FSC は労働安全には間違いなく貢献したと思います。初めのころはゴム付き手袋、地下足袋でチェーンソーを振るっていました。職人が親方の背中を見て学ぶという世界で、けがも多かった。安全靴は歩きにくいと言われ、普及に時間がかかりましたが、今では普通になりました。

◀2003年7月、韓国に招かれて森林認証のワークショップを行った際の写真。富村（一番左）、速水（中央）、佐々木（右から2番目）、白石（一番右）

21年後、上記写真の左から2番目の韓国人留学生を除き、同じ並びの4人。▶

佐々木　林業は男性社会で、初期の頃は、女一人で男性の中に入って審査させていただくという感じでした。FSC の規格にジェンダーについての基準が入り、以前は男女差別についてインタビューしていた女性職員が段々とマネジメント候補に上がってきて、審査にも徐々に深く対応されるようになってきているのを見て、FSC の効果や時代の変化を感じます。機械化によって、今は女性も随分林業の現場に入ってきやすくなりました。

速水　環境意識も高まりました。

佐々木　河川の際までスギを植えるのではなく、何 m は広葉樹にするという「バッファゾーン」を設けるのは FSC から始まったと思います。

速水　カリフォルニアでは 100m ですと言われましたが、そんなことをしたら、日本では植えられなくなってしまう。

白石　議論を重ね、樹高分にしようかということになりましたよね。

―審査で、FSC ならではの部分はありますか。

佐々木　当社では、FSC 以外の森林認証も行っていますが、文書化や記録を残すという点や、組織体制については共通する部分が多いですね。一方で、FSC ならではのものもあります。

白石　一定割合以上の保全地域を求めるのは FSC 特有ですよね。

佐々木　高い保護価値 (HCV) も FSC ならではです。

富村　HCV は元々 FSC が生み出したコンセプトですから。

佐々木　認定機関の厳格さも FSC の特徴だと思います。私たち認証機関は毎年認定機関、ASI から監査を受けます。審査の立ち合いの他、サンプリングでの報告書のレビューや ASI による認証取得者への直接監査による審査機関パフォーマンスの検証もあり、かなり厳しいのでいつも気が抜けません。（笑）

■「役に立つ森林認証」を目指して

速水　認証を取るメリットをよく聞かれるけれど、認証は取れば自動的に木が高く売れるとか、そういうものではない。自分で役立てなければ意味がない。

佐々木　認証を取れば木材が高く売れるのかというのは昔からよく聞かれますが、今でもはっきりと肯定できないのは辛いところです。FSC を効果的に使っている事例ですと、例えば、岐阜県が音頭を取って複数の森林組合が一緒になってグループ認証を取得していますが、見学や情報交換をしたり、他の組合の審査の受け答えからアイデアを得たり、

▲佐々木聡子さん

▲白石則彦さん

▲速水亨さん

▲富村周平さん

コミュニケーションツールにもなっているようです。

白石　規格に、「地域の歴史を含めて地域の自然災害のリスクや傾向を確認する」という要求事項が入りました。大震災後、速水林業の森林には津波の避難路がつくられましたが、防災については特に地域との情報の共有が重要です。FSC の要求事項を地域管理にも拡張して、地域防災に役立ててほしいと思います。

速水　FSC の規格はよく考えられ、議論を尽くされて作られているので、行政など、参考にできる部分はたくさんあります。認証取得に関わらず、そうやって是非活用してもらいたいですね。

白石　最近の FSC は ISO 色が強くなっていますが、「この文書がありますか」と聞くだけの審査では、審査は通っても魂がない。森林経営に役立つかどうかは疑問です。私は審査で、報告書に書く程の不順守ではないが気になる点は口頭で伝え、宿題として残してきます。国際基準を使い、第三者の専門家から評価を受ける意義を感じていただけたらと思います。

富村　審査員としても、認証を取って山が良くなったと思っていただけたら嬉しいです。お金を払って見てもらうのですから、そうでなければ意味がないですね。

白石　いろいろなレベルの受審者がいるので、低く入って、高く登ってほしいというのが私の思いです。FSC が森林管理の意識やレベルを高める一助になれば。

速水　高く登るのを、審査員だけではなく、FSC ジャパンも手伝っていくのが大事なのかな。

■未来に向けて

―最後に伝えたいことをお願いします。

富村　森林認証の原点を忘れない、それだけです。

速水　自分が考えて林業をする入口、そのチャンスを与えてくれるのが FSC です。グループでやる場合は、FSC という基準を使って皆で共通の意識を持って森林を管理していける。他にはなかなかない便利な道具ですが、使い方を知らないと意味がない。生物多様性や適切な森林管理に価値を見出してくださる方々と連携する、そのネットワーク構築にも役立つのではと思います。

佐々木　FSC 誕生から 30 年経って、初期のころに推進してくださった方々が引退される時期になってきました。これまで続いてきた取り組みが次の世代、若い方々に引き継がれるよう、認証をうまくツールに使っていただきたいと思います。

白石　森林関係者には、生態系を通じた防災・減災とか、2030 年までに陸と海の 30％以上を健全な生態系として保全しようという「30by30（サーティー・バイ・サーティー）」などの社会の動きを知ってほしい。森林の価値を感じて、総合的な位置づけで森林を見てほしいと願っています。私は林業は産業であって、かつ公共事業だと言っています。なぜ、補助金が付いているのか。それは、社会に貢献しなければならないからです。森林が防災や生物多様性保全、地球温暖化防止などの社会課題解決に貢献することを、森林関係者は自覚してほしい。森林認証はそのよいきっかけ、ツールになると思います。

速水亨さん

速水林業代表、㈱森林再生システム代表取締役、FSC ジャパン副代表。「地域との共生、自然との共生」を目指す林業で日本の林業界を常にリードする。2000 年日本初の FSC 認証取得。農林水産省林政審議会委員、日本林業経営者協会会長等、森林･林業界の要職を多数歴任。平成 30 年農林水産祭天皇杯を夫婦で受賞。

白石則彦さん

東京大学名誉教授。森林経理学、森林計測学専門。林野庁林業試験場（現森林総合研究所）における研究を経、東京大学にて 20 年余り林学の教育研究に携わる。1999 年、国内初の FSC FM 認証審査から審査員として活躍。FSC ジャパン理事。

富村周平さん

㈱森林再生システム元取締役、富村環境事務所代表。アフリカの開発援助における技術協力や大手環境コンサル会社勤務を経、森林・環境専門のコンサルタントとして独立。1999 年、国内初の FSC FM 認証審査から審査員を務め、審査員の立場から国内の FSC の発展を牽引してきた。2024 年 3 月まで FSC ジャパン理事。

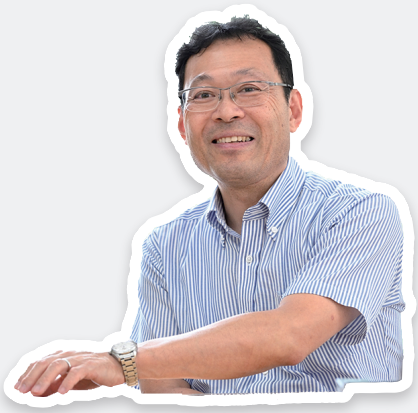
佐々木聡子さん

SGS ジャパン㈱森林認証　認証マネージャー。2001 年東京大学大学院にて森林科学修士課程修了後、認証機関の SGS ジャパンにて FSC 認証の審査サービスに従事。FSC をはじめとする森林認証サービスを牽引する。

FSCで
森を守る

3番目のFM認証
先見の明に誇り

アサヒビールグループジャパン株式会社 元執行役員
秋葉哲さん



当社は戦前から広島県に総面積2165haの社有林「アサヒの森」を持っています。元は戦争でビール瓶の蓋に使っていた輸入コルクが入手しづらくなるのを懸念し、代用になるアベマキの自生する森林を入手したものです。その後食品会社として森林を所有する意味を模索する中で、会社の社会的価値を高めることに使えないかと考え、森林管理を国際水準で客観的に評価してくれるFSC認証を知ったのです。それまでも現場の職員が責任をもって管理をしていましたが、FSCから初めて学ぶことも多く、現場の方々にそれを理解してもらうのに何度も足を運びました。国内では３番目のFM認証取得でしたが、審査では、基準のひとつひとつにどういう意味があるのか審査員から教えてもらったものです。

認証取得後、認証材で作った絵馬を飲食店に配ったり、2番目に認証を取得された梼原町と勉強会や文化交流を行ったり、FSCは新たなつながりを作るコミュニケーションツールとなりました。他の企業に先駆けて環境報告書にFSC認証紙を採用し、FSC認証紙の普及にも一役買ったのではないかと思います。自然観察会の開催、県立広島大学とのワークショップの実施など、社会的なつながりができたことも大きな財産です。

まだSDGsもない時代に、営利企業が森林管理やその認証にお金をかけるのは勇気が必要だったと思いますが、FSC認証を取得したのは先見の明であり、会社として世の中に貢献したという誇りになっています。

アサヒの森のアベマキ林　© アサヒビール

下川町の認証林　© 藤島斉

山梨県有林の管理に携わる皆さん

認証審査を通じて得られた成果と今後への期待

下川町
主査森林づくり専門員
斎藤丈寛さん

私たちは2003年、国と町有林、私有林が連携するかたちで北海道内第1号としてFMグループ認証を取得しました。この背景には、2001年に森林・林業基本法が制定され、林業政策が木材生産重視から公益的機能・環境重視へと大きく転換した動きがありました。これをきっかけに、林業を基盤としたこの地域がどのようにすれば生き残っていけるかを真剣に考えるようになり、地域の利害関係者を集めた下川小流域管理システム推進協議会で議論する中、課題解決のためのツールとしてFSC認証制度に出合ったのです。FSCの意義は、環境、社会、経済の3つの要素を含む世界共通の原則と基準の下で責任ある森林管理を行っていることを第三者の目で審査してもらうことだと理解しています。下川町はこの認証審査を通じて、特に環境や労働安全に対する意識は向上し、施業方法の工夫など様々な改善の努力がなされてきました。また、重要ながらつい後回しになってしまいがちなテーマ（例えば、アイヌなどの先住民族の権利問題など）にも気づかせてくれました。

なかなか認証木材の価値が上がらない課題は依然としてありますが、FSCの価値を認める企業からの寄付を受けた森づくりが始まったり、カーボンクレジットの販売戦略について、同じく認証林を持つ北海道美幌町などと連携したりするなど、今は、直接的な木材取引に加えてメリットが大きいと感じています。

今後のFSCへの期待として、日本の林業特有の課題についてリアルタイムで議論するような仕組みができ、それが各地域における審査や国内規格に反映できたらよいのではないかと感じています。例えば、現在、北海道では野鼠による森林被害が発生していますが、野鼠対策についてはFSCに評価基準がないため、難しい問題に直面しています。FSC認証制度はこのような現場で起きている問題にもっと目を向けるべきであり、今後、さらに地域特性を評価し対応すべきと考えます。また、紙のFSCマークが普及したように、木材のラベリングの普及も期待しており、例えば木質非住宅に認証材利用を努力義務にしていく政策提言や木材につくFSCラベルを公共の場でもっと人の目に触れるようにプロモーションをしていってほしいと思っています。

下川町としては、今後はFSCとも親和性の高い生物多様性保全の取り組みを可視化していくことにも注力し、それが森林整備を始めとする地域経済にもメリットをもたらすものになるよう努力していきたいと考えています。

客観的評価で森林管理に自信

山梨県林政部県有林課 課長補佐
青山将英さん

副主幹
辻野新子さん

山梨県は2003年に公有林としては日本で初めてFM認証を取得しました。山梨県には県面積の約3分の1にあたる15万8000haの県有林があり、その9割超の森林が認証を受けています。

認証を取得してから、現場の安全装備は格段に良くなりました。最初は「業務が増える」などの反対意見も多くありましたが、職員間の理解も進み「FSCが認められる時代になった」と実感できることが増えてきました。FSC認証を受けていることにより、「適切な森林管理をしている」と胸を張って言え、未来につながると感じています。

FSCの要求事項は難解で、県の実状と合わないと感じることもありますが、FSCの審査は、そのような点について審査員と議論して相互の理解を深め、建設的な取り組みに繋がっていくのが良い点だと思います。また直近の審査ではモニタリングについて高い評価をいただき、当たり前と思っていた取り組みも客観的に評価してもらえたことで自信をもつことができました。

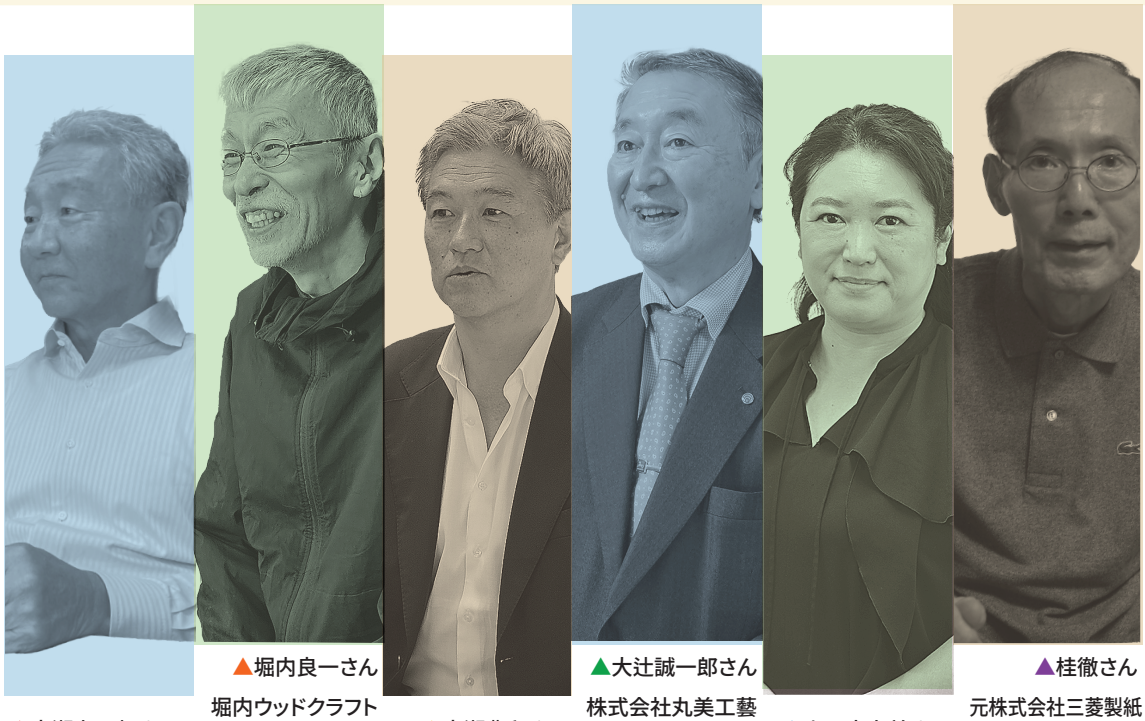
県では、年間約9万㎥のFSC認証材を出荷しており、大手コンビニエンスストアが取り組む店舗の木質化の材としても使われています。企業が認証材を使用することは「CSR」としてだけではなく、「調達方針」へ盛り込まれ、経営の根幹を成すようになってきました。FSCジャパンには、木材の高層ビル建築の需要に関する情報提供や、FSCの価値を日本においてどう捉えるかといった日本独自の課題に取り組んでほしいと思います。

座談会

サステナビリティ市場の開拓者たち

CoCのパイオニアとFSC認証の市場展開

FSC がまだ世間では全く知られていなかった初期から主に CoC 側から FSC 認証に取り組み、応援し続けて来られた方々にお集まりいただき、これまでの歩みを振り返りながらお話しいただきました。



▲市瀬泰一郎さん
株式会社市瀬
代表取締役社長

▲堀内良一さん
堀内ウッドクラフト

▲市瀬豊和さん
株式会社山櫻
代表取締役社長

▲大辻誠一郎さん
株式会社丸美工藝
代表取締役社長

▲山口真奈美さん
一般社団法人
日本サステナブル・
ラベル協会 代表

▲桂徹さん
元株式会社三菱製紙
CSR推進室長

■日本の FSC CoC 認証の先駆者たち

―まだ世間一般では全く FSCが知られていなかった初期から FSCに取り組まれた、その経緯を教えていただけますか。

桂　当時、環境に良い紙と言えば再生紙しかありませんでした。三菱製紙は再生紙では後れをとっていて、それに代わる環境に良いものを探していていました。環境負荷の定量化をする LCA（ライフサイクルアセスメント）の観点から、バージンパルプを使ったものでも環境にやさしいものができることがわかり、森林認証に着目したのが始まりです。製紙企業として日本初の認証取得となりましたが、最初は営業に回っても、お金も手間もかけて認証を取って、高くも売れないのに誰が買うのかと言われましたね。

市瀬（泰）　当社（市瀬）は紙の卸商です。2002 年に当時の三菱製紙の恩田社長の講演会で製紙業界で初めて FSC 認証紙の生産に取り組むというお話を聞きました。環境配慮の紙という点では当時は再生紙一辺倒でしたから FSC 認証紙の概念がとても新鮮に感じ 2003 年に紙流通業の中ではいち早く CoC 認証を取得しました。

市瀬（豊）　当社（山櫻）はオフィス用紙製品を中心とした紙製品事業を展開していますが、古くから環境を意識し、いち早く古紙を活用した製品を市場に出してきました。FSC 認証を知り、2006 年ごろから認証紙の製品を作り始めたのですが、2008 年、実際の古紙配合率が表示されているよりも低いという古紙配合率偽装問題が発覚しました。当時、当社で販売していた古紙 100％の名刺の紙も実際には古紙 100％ではなかったのです。「古紙は環境に良い」という再生紙神話を信じることができなくなり、認証紙に切り替えて

いきました。

大辻　うち（丸美工藝）は紙ではなく、主にプラスチックの日用品を扱っています。FSC 認証を知り、新たなプラスチック製品を開発しようと速水林業のヒノキ木粉 100%のダストボックスを作りましたが売れたのは 1、2 個。高級志向のデパートで唯一扱われた1個 8,000 円のプラスチックのごみ箱でしたが、ビジネスとしては大失敗でしたね（笑）。しかし一方でまだ日本では FSC が全く知られていなかった頃、ロンドンやパリなどの展示会で FSC を掲げているメーカーのブースに行って FSC マークの入った名刺を差し出すと、すぐに「ビジネスをしよう」と言われました。使い方によって FSC は素晴らしいコミュニケーションツールになることを感じました。

堀内　私は木工を仕事としている個人事業主です。お椀やお盆などの木地師として 1993 年に独立しましたが、中国から安価なものが輸入されて需要が減る中、生き残りの道をかけて勉強していたところ、2000 年に速水林業の速水さんの話を直に聞き FSC 認証を知りました。面白そうだし、差別化のツールになるかもしれないと興味を持ちましたが、FM 認証の森林が近くにはなく、認証材が欲しくても調達できない状況でした。2003 年に山梨県有林が FM 認証を取得し、認証材調達の目途が立ち、2004 年に認証を取得したのです。

■山笑会と日本の FSC 認証市場の萌芽期

ー皆様は WWF が組織した「山笑会」というグループを通じてつながられていたそうですが、どのようなグループで、どのような活動をされていたのですか。

山口　山笑会は、当時 WWF ジャパンにおられて FSC を日本に初めて紹介し、後に FSC ジャパンの事務局長にもなられた前澤さんの呼びかけで作られた、責任ある木材調達を促進するためのグループです。当時、FSC ジャパンはまだ設立されておらず、WWF が FSC 認証推進の旗振り役でした。メンバーは初期の FSC 認証取得者や FSC の趣旨に賛同する方々で、いろいろな立場の方がいらっしゃいました。私は大学院生として認証の有効性などを研究していた頃に、山笑会の方々とつながりを持ちました。

市瀬（泰）　当社は桂さんからの紹介で山笑会に加わりました。十数社いましたが、FM 認証、木材の CoC 認証関係の方が多く、紙では三菱製紙さんとうちだけでした。欧州のように派手に宣伝はできないけれど、どうやって日本で FSC マークを広げていこうかという議論をしていました。速水さんから紙製品、印刷物は消費者にとって一番身近なものだから紙から普及させて欲しいと大きく背中をたたかれたことを覚えています。

堀内　認証を取得したけれどもなかなかビジネスに結びつかない、その不満も含めて情報共有できる貴重な場でもありましたね（笑）。FSC 認証へのアプローチや温度感はメンバーそれぞれでしたが、山笑会を通じて認証取得者の横のつながりができたのは大きかったです。

桂　三菱製紙は当時 WWF で FSC 普及の音頭をとっていた前澤さんの呼びかけに応えて加わりました。PR や営業の手段が欲しかったので、同じく FSC 認証に取り組む仲間ができたのはよかったです。山笑会のコーディネーターだった WWF ジャパンの那須さん、日本で初めて FSC FM 認証を取得された速水林業の速水さんや他の企業に先駆けて FSC 認証紙を調達方針に含めた富士ゼロックスオフィスサプライの大堀さんらと一緒に地方で FSC のセミナーを行ったりもしましたね。

山口　私もセミナーにご一緒させて頂いたこともありますが、いろいろな立場の方が FSC をどう普及させようかということで集まったという印象です。FSC・FM 認証林の現場を見るツアーもありましたね。

■ FSC 認証紙の需要拡大と時代の節目

ー紙業界では、FSC 認証紙への需要が伸びてきましたが、転換点となるような出来事はありましたか。

市瀬（泰）　最初期では、東京大学の安井至教授のグループにより、環境負荷の低減、CO_2 削減の観点からは再生紙が良いわけではないという論文が発表されたことで、再生紙至上主義だった紙業界の常識が覆されました。うちも桂さんと相談しながら、論文をわかりやすく要約した文書を作り、大手企業を回り、FSC 認証紙の採用を呼びかけました。その効果もあり、2004 年は 15 社が採用、2005 年は 30 社、2006 年は 90 社と急増しました。

市瀬（豊）　前述の古紙配合率偽造問題が再生紙神話の崩壊に追い打ちをかけ、認証紙の追い風となったのではないかと思います。

大辻　2005 年には、オーストラリアの伐採企業が原生林を破壊し、伐採された木の多くが紙パルプとして日本に輸入さ

れていることが問題になりました。それによって、紙の原材料に関するリスクを認識し、認証に切り替えた日本の企業も多かったと思います。

桂　それについてはFSC認証の信頼性が試された出来事でもありました。環境NGOからの批判を受け、オーストラリアの大手製紙用原材料供給者からの供給が一時的にストップし、多くの大手製紙企業が認証紙の扱いを拡大する中で認証紙が数か月生産できないという事態となりました。三菱製紙では現地に調査に行ったりして細かく認証機関と調整し対応したため、何とか生産を続けることができましたが、認証制度の安定性について疑念の目が向けられた出来事でした。

市瀬（泰）　認証紙の需要拡大の理由として、認証紙が質に対する顧客のニーズも満たすことができるという点も大きかったでしょう。紙はリサイクルをすると繊維が短くなって品質が低下します。認証だとバージン木材が使えるので、良質の紙が作れます。

山口　クオリティは制限されない、プラス環境に良いというのがFSC認証紙の売りです。このためクオリティを求める印刷物の場合、入札で再生紙のみならずFSC認証紙も条件に入ることが増えています。2017年には東京オリンピック・パラリンピック2020の調達コードに認証制度が活用され、注目されました。企業の調達方針や官公庁でもFSC認証紙を採用するところも出てきました。

市瀬（豊）　2015年に国連で採択された持続可能な開発目標(SDGs)により、よりFSCを説明しやすくなったということもあります。企業の顔となる会社案内、環境・CSR報告書では特にFSC認証紙を求められることは多いですね。名刺や企業の封筒など人の目に触れやすいものでもFSCが主流化してきているのを感じます。

桂　まずは消費者に見えやすい紙でFSC認証を普及させ、認知を高めていくというのは当初からの戦略だったように思います。FSCラベル入りのパッケージの普及を見ると、ある程度第一目標は達成されたのかもしれません。

―山笑会の時代から20年余り、これまでを振り返ってFSCについてどのように考えられていますか。

大辻　プラスチックの生活用品中心の事業でFSCを導入したのは時代を先取りし過ぎてしまったようですが（笑）、それでもFSCを通し皆様と関われたことに意義を感じています。他の認証がいくつも出てきた中、FSCという厳しい規格が生き残り、認証製品が広まってきたのは、良い思い出です。

堀内　個人でなぜ認証を取得するのかとよく聞かれますが、私の場合は経済的にも合理的な選択でした。私の自慢は、認証を取得してから今まで毎年必ず認証製品を製造、出荷してきたことです。木工屋で認証を持っているところが少ないためか、認証を持っているというだけで営業しなくても入ってくる仕事があります。認証の維持には費用がかかりますが、同じ費用で展示会に出展して名刺を100枚配っても仕事が来るかはわかりません。認証を通じてネットワークを築け、認証というキーワードで仕事が入ってくるのは、個人事業主としてはとてもありがたい。FSC認証を通していろいろな方とつながることができ、山側の問題にも触れ、視野が広がったことも非常に有意義でした。

山口　私は皆様とのつながりを皮切りに、FSC認証機関の日本窓口となったり、日本サステナブル・ラベル協会として普及啓発に携わったりと立場を変えながら長年FSC認証に関わってきました。今年からはFSCジャパンの理事もさせていただいています。研究の傍ら環境・サステナビリティ関係のお仕事もさせて頂く中で起業し20年以上になりますが、最近では認証取得に関するご相談も多く、サステナブル調達やSDGs推進に向けて、企業側も本気で取り組んでおられます。行政や消費者向けにはエシカル消費の文脈でFSCが紹介されることもあり、様々な角度で見てきたからかもしれませんが、FSCと関わるステークホルダーの幅も広がっている気がします。

市瀬（豊）　紙業界では認証紙は浸透し、今では供給が需要に追い付かないほどになっています。当社では一貫してFSC認証紙の取り扱い拡大を進めてきており、現在、約2700種類の紙製品を在庫・販売していますが、その約7割は認証紙です。事務用紙製品は価格競争が激しく、認証紙は価格が上乗せになるため厳しいのですが、先行投資、環境貢献と考え会社の方針として続けています。

大辻　紙ではFSCも大分広まりましたが、買う人が認証を理解して購入しているかというと、必ずしもそうではない。買う側がFSC製品を優先的に選ぶようになったら、また違ってくると思います。

山口　日本サステナブル・ラベル協会で行った調査では、FSC認知度は若い人ほど高くなっています。FSCを知って優先的に選ぶ方はまだメインの購買層になっていませんが、潜在的には増えていると思います。

大辻　確かに、温暖化を肌で感じている10代、20代の若い世代は消費傾向が変化しているようですね。例えば、「生涯保証」をつけた3000円の樹脂製食器を買ったり、大量生産・大量消費にくみすることなく、一生ものを選ぶようになっています。今後は製品寿命の長い木材での普及を期待しています。FSC認証の木ビルが主流になると嬉しいですね。

堀内　紙業界の成功体験には木材も是非あやかりたいですね。紙の原材料の多くは輸入材であり、国内の認証林とは

◀日本初の FSC 認証印刷物
（三菱製紙の認証紙販促資料）

あまりつながっていないのが寂しいところです。

■未来に向けて

ー最後に、今後に向けての抱負や、伝えたいメッセージをお願いいたします。

桂　次の世代に FSC の価値をどう伝えていくのかが重要です。子どもたちに、持続可能な未来に沿う、自分たちの足が地についた活動として身につけていけるよう、教育や支援をすることが大事だと思います。

市瀬（豊）　地道に FSC 認証紙の扱いを拡大し、気がついたら認証紙を使っていたという状況を作り出す努力を続けていきたいと思います。民間では認証紙は広がっていますが、国の調達方針では封筒には古紙利用が求められ、FSC 指定はないに等しい状態です。FSC 認証紙を調達方針に入れるよう国に働きかけたいですね。SDGs の観点、地球環境問題や人権問題の解決に貢献できるのが FSC 認証であり、非常に意義があります。これからも微力ながら認証紙製品を作っていきたいと思います。

市瀬（泰）　紙製品が FSC の価値を世の中に広めてきたことに間違いはありません。環境問題は難しく考えてしまうとハードルが高くなりがちですが、身近な製品、素材を選択するという行為は比較的簡単であると思います。その選択肢のひとつが FSC 認証製品です。これからもその役割はますます重要になってくると思います。

堀内　ぶれずに FSC 推しです。林業系の展示会を見ても、FSC 推しの企業はまだ少ない。小さな個人事業主ですが、認証木製品のオファーが来た時、それを実現できるよう準備をする、お客様が作りたい時にできるようにすることが普及につながると信じています。

大辻　FSC の原点回帰を呼びかけたい。環境 NGO からの支持によって FSC は環境・社会的な信頼を築いてきました。FSC ジャパンが WWF ジャパンやグリーンピースジャパンなど発信力の大きい NGO と協力することで影響力も高まると思います。今後も FSC ジャパン会員として応援していきます。

山口　サステナブルな社会実現のためには、企業や公共の調達で FSC を採用することが有用だということを、もっと浸透させていきたいです。認証に国産という要素を加え、子どもたちにも、木を使うことが生活に必要であり、それを環境や地域社会を守りながらどう自分たちの生活に落とし込んでいくのか、自分事として考えられるようにしたいですね。

【寄稿】FSC と日本の製紙産業の持続可能な発展に向けて

森林認証制度 FSC が創設 30 周年を迎えられたことに心よりお祝い申し上げます。

私は 2006 年から 2018 年まで日本製紙連合会におりましたが、森林資源を大量に消費する製紙産業にとって、木材の持続可能性の確保に積極的に取り組むことは最も重要な責務です。製紙連合会は早くから「環境に対する自主行動計画」や「違法伐採問題に対する行動指針」を定め、責任ある調達に注力してきましたが、当初は森林認証の認知度も低く、FSC マークがついた製品もあまり目にすることはありませんでした。

認証の普及でとりわけ忘れ難いのは、2008 年、大手製紙企業が次々と認証を取得し、認証紙の供給体制を整備する中、オーストラリアからの認証原材料が滞り、FSC 認証紙の安定生産が危ぶまれたことでした。タスマニア島のユーカリ原生林伐採問題が環境 NGO からの批判を受け、管理木材の調達が難しくなったのですが、そうした問題も乗り越え、その後認証紙市場は順調に拡大を続けています。

今では多くの製紙企業が認証を取得し、FSC マークのついた様々な紙製品を街中で容易に目にするようになりました。グリーン購入法やクリーンウッド法の合法性確認の手段としても、森林認証が大いに活用されています。SDGs が広く認知され、持続可能性の確保が社会全体の喫緊の課題となる中、森林認証の重要性は増しています。森林のみならず、木材や製紙産業、ひいては社会全体の持続可能性を促進する森林認証制度の更なる発展をお祈り申し上げます。

上河潔氏

東京大学農学部林学科卒、カリフォルニア大学バークレー校修士課程修了。昭和 52 年農林水産省に入省、森林・林業に関わる様々な業務に従事。平成 18 年日本製紙連合会常務理事就任し、以来十年以上にわたり製紙業界の課題解決に奔走。現在、森林・自然環境技術教育研究センターをはじめ、複数の森林・林業関連の組織の役職を兼務する。

広がるFSC

「木を使う時はFSCを」という文化をつくりたい

浜松市 林業振興課
藤江俊充さん
枝窪圭人さん

浜松市には日本三大人工美林の天竜美林があります。「1本の木に付加価値を付け、林業を生業として存続させたい」との考えから、市や市内6森林組合などで構成される天竜林材業振興協議会は約8000人の森林所有者の同意を集めて、2010年にFSC FM認証を取得しました。現在、認証林は4万9703ha（2024年10月）に拡大し、市町村別取得面積では日本一です。この広大な認証面積と多くのFSC CoC認証取得者によるFSCサプライチェーンの構築は、東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会関連施設である有明体操競技場に天竜材（FSC認証材）を納材するなどの大きな成果につながりました。FSC認証は「なぜ天竜材を使うのか」を説明するツールとして有効です。また、地元の林材業関係者がFSCというキーワードで一つのテーブルにつくことができ、効果的な水平・垂直連携ができるようになりました。このFSCを核とした連携は、森林・林業の明るい未来をつくる可能性があると思います。まずはステークホルダーがまとまってFSCをPRすることにより、みんなで「木を使う時はFSCを」という文化をつくっていきましょう。

持続可能な林業の実現が持続可能な町づくりにつながるという考えから、2015年に南三陸森林管理協議会としてグループ認証を取得しました。これにより、希少種保護や労働安全など、これまで個別に進めていた取り組みをFSC基準に照らし合わせ、グループ全体でレベルアップできる体制が整いました。FSCとASC（養殖水産物の認証）は、地域が目指す方向性を示す旗印となり、南三陸町のブランド力を高めてくれています。

震災復興支援の注目に変わり、サステナビリティの観点で町に注目してくれる人が増えており、ネイチャーポジティブをテーマにWWFジャパンをはじめ多くの大学・団体との連携も始まりました。自治体や企業のスタディツアーの受入れも増加し、観光資源としても大きな役割を担っています。外部から注目されることで、町の人たちの意識が高まり、町が元気になっていくという好循環につながっています。今後は木材だけでなく、森林自体を評価し、森林を守るという公共サービス的な価値を企業が評価してくれるような、川上と川下、地方と都会が持ちつ持たれつの関係を模索していきたいと思っています。

地域の象徴として、そして地域と外部をつなぐ架け橋としてのFSC

株式会社佐久 専務取締役
佐藤太一さん

長年の取り組みがブランドとしての確固たる誇りに

王子ネピア株式会社 執行役員マーケティング本部長
齋藤理佐子さん

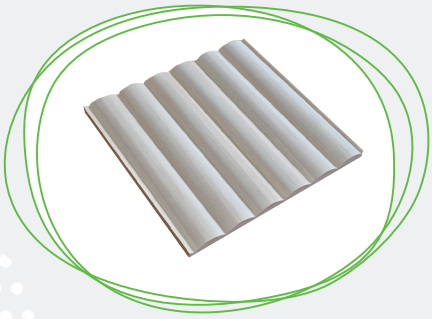
王子グループの認証取得後、ティシュペーパーなどの毎日使う消費財こそ採用すべきだと考え、2011年に認証を取得しました。

「FSC認証なんて売れるのか？」。当初は社内での理解も得られず、営業活動も難航しました。しかし、環境意識の高い小売店からの引き合いが増え、近年ではJSBI2022※で、化粧品・トイレタリー部門で1位を獲得。全体でも306社中４位になりました。長年の取り組みが消費者にも評価され、ブランドイメージ向上に大きく貢献していると感じます。また、2017年からはWWFジャパンとライセンス契約を結び、お子様でもわかるFSCの冊子を店頭で配布するなど、FSC認証紙の普及促進にも取り組んでいます。しかし、環境への取り組みは、必ずしも利益に直結するとは限りません。投資が必要な分野であり、企業として持続可能な取り組みを続けることは容易ではありません。それでも、森林資源を使ってものづくりをしている企業にとって、FSCに取り組むことは企業の使命だと考えています。

※サステナブル・ブランド・ジャパンによる「生活者から見たSDGsに貢献する企業ブランド調査」

Developments of FSC

FSCで日本の山を良くしたい



株式会社中村製材所
代表取締役
中村展章さん

1990年代後半、当時は木材の自給率が20％で、木材の買い付けに外国に行くことが多く、違法伐採や森林破壊の問題に気づきました。外材の持続可能性に疑問を感じ、国産材に目を向けたのです。自給率を上げ、日本の山を良くしたいとの思いから学校で使う机の木質化に取り組んだのですが、補助金の一律カットがあり、評価されないことに失望しました。他に環境に貢献できる方法はないか模索していた時に出会ったのがFSCでした。2005年FSC CoC認証を取得し、最初はFSCの認知は低く孤軍奮闘していましたが、SDGsというキーワードによりFSCへの理解が深まり、単なる共感から共創の時代に入ったと思います。小径木を繋ぎ合わせて有効に活用した突板「SKINWOOD」も開発し、今では環境・社会に配慮した建物を求めるお客様からの引き合いも多くなりました。FSC認証製品の使用が評価され、山側でFM認証取得も増えるという正の連鎖が生まれてくることを期待しています。

コストではなくブランドへの投資と考える

2015年、SGDsが採択され、「これは世界を変えるものだ」と衝撃を受けました。自社で取り組めることは何かを調べ始め、FSC認証と出合いました。すでにいくつかの容器包装類の紙はFSC認証紙に切り替わっておりましたが、店内でお食事をする時に使用するトレイの上に敷くトレイマットの素材見直しが行われた際、ブランドイメージ向上に繋がると社内担当者を説得し、結果FSC認証紙を採用することになりました。役員会では「認証に伴う費用はコストではありません。マクドナルドのブランド価値向上のための投資です」と説明しました。実際、日経ESGの環境ブランド評価は認証取得後他の環境施策との相乗効果もあり、継続して上がっておりますし、何より社員は環境に対する施策にプライドを持ってくれています。FSC製品を使うことがゴールではなく、その先の地球環境を良くすることがゴールだと考えます。今後もFSC認証に取り組むことで、生物多様性保全、気候変動対策、人権問題の三つの支援につながっているということを伝えていきたいと思います。

元 日本マクドナルド株式会社
岩井正人さん
（絵てがみ作家）

広がるFSC

FSC 認証と共に、森林保全に貢献し、長く愛される家具を提供する

2006年に家具業界では日本初のCoC認証を取得しました。認証材がどこにあるのかの調査から始め、十数社のサプライヤーに説明を重ね、認証取得をすすめるなど、高いハードルを超えながら認証製品を実現しました。2021年の東京オリンピックで納入した家具は認証製品で、FSC認証をスタンダードにするという意識が社内で確立しています。大手コーヒーチェーンのお客様には「この価格と品質でFSC認証製品を使えるとは思わなかった」と評価され、チェアを採用していただきました。認証製品で構成された家具シリーズ「D&D」は、市場から好評を得ており、認証が選択の判断基準になっていると感じます。また、環境配慮の関心の高まりなどを受けて、2024年10月には、「ゼロカーボンファニチャー」をリリース、FSC認証材を活用しながら、製品のライフサイクルで排出される二酸化炭素の相殺を当社独自基準で実現しています。「お客様が意識せずに選んだら、その製品がFSCであった」となるくらい、FSCをスタンダードにすることで、森林保全につなげていきたいと思います。

株式会社オリバー
常務取締役生産本部長兼経営企画室担当
浦隅明弘さん

海洋プラスチック問題で、紙を見直す動き

朋和産業株式会社
商品開発部長・執行役員
中間浩太郎さん

2015年に取引先のセブンイレブンさんから「環境に良い包材」の相談をいただいたのをきっかけにFSC認証を取得しました。2019年からは自社工場でも認証製品（おにぎりやデザートのパッケージ）の製造を始めましたが、最近は社内全体にFSCが根付いてきたと感じます。以前は商品の背面に印刷することが一般的だったFSCラベルですが、最近、商品の前面への印刷を希望されるお客様も増えてきています。また、他の認証を取得してみて気がついたのですが、FSC認証は、合理的で運用しやすいと思います。また、FSCの組織が日本にあることで、さまざまな取り組みや相談ができるのはありがたいと感じています。数年前から海洋プラスチック問題が世界的に注目され、紙を見直す動きが強まっていますが、紙にすることで機能性があがる側面もあります。ただ、木材資源を使用することの是非について議論もありました。そのような中で、持続可能性を訴求できるFSC認証は、お客様にも我々にもメリットがあると思っています。

Developments of FSC

トレーサビリティを強化し、企業価値の向上へ

花王株式会社
ESG部門ESG活動推進部長
高橋正勝さん

2013年から包装容器でFSC認証製品を使用し始め、2016年には日本で初めて段ボールで認証製品を導入しました。導入にあたり、サプライヤーを訪問した際は、ESGを考慮していない製品の提案をされました。サステナビリティを重視していることを説明し、仲間になってもらうことが重要で、難しい部分でした。認証制度の必要性に関しては、社内での理解、啓発にも苦労しましたが、花王には1960年代の公害の社会問題化以降、環境に責任を持つという考え方が根付いているので、導入できたのだと思います。現在は会社全体としてKPIを設定し、認証製品の調達に取り組んでいます。FSCは基準が明確で、世界的にも認知度、信頼性が高く、企業価値の向上にもつながっています。トレーサビリティは自社だけではカバーしきれないため、認証制度は重要です。今後はFSCの仕組みを利用してトレーサビリティの見える化ができるようになることを願っています。

FSCでつながる世界

FSC Japan 30周年に寄せて

テトラパックのFSCの取り組みと展開

FSC Japan 30周年おめでとうございます。記念すべき節目に際し、FSCの理念と実績に敬意を表します。テトラパックは、FSCの持続可能な森林管理、責任ある資源調達に深く共感し、賛同しています。

テトラパックの紙容器の約70%は板紙で構成されています。当社の板紙はすべてFSC認証を取得した森林や、その他の管理された供給源からの木材で作られています。認証材を使用することにより、生物多様性の保護、環境保全、そして原材料の製造・加工工場に関連する人々の権利保護を目的とした責任ある調達の証を得ています。

テトラパックのFSC認証の取り組みは、2007年にヨーロッパでスタートしました。FSC自体の認知度の高さにより、認証ラベル付き紙容器の市場導入はスムーズに進みました。

一方、日本においては、2013年にCoC（Chain of Custody）認証を取得し、国内での展開を開始しましたが、FSC自体の認知度の低さ、飲料用の紙容器に認証ラベルを印刷するスペースの制約などの理由から、初期の展開は思うようには進みませんでした。当社の国内包装資材出荷実績に占めるFSC認証ラベル付き紙容器の割合は、2016年時点でわずか10%でした。

そこで、当社は顧客へのFSC認証ラベル掲載のご提案に加え、FSC Japanとともにキャンペーンやセミナー、イベントを通して、小売、消費者を含む各所へFSCの価値訴求を実施しました。さらに、SDGsの認知が高まる中で「FSC認証が14のSDGs達成に貢献する」というメッセージを発信することで、FSCの価値が広く理解されるきっかけとなり、国内市場におけるFSC認証ラベル付き紙容器の展開を加速させました。

2023年末時点では、当社の国内包装資材出荷実績の実に77%がFSC認証ラベル付きとなり、大きく伸長しました。これは、グローバル全体での83%に近い数字であり、FSC認証ラベルが国内においてもスタンダードになったことを示していると言えるでしょう。昨今、テトラパックの紙容器以外にも、紙袋やその他の紙製容器包装にFSC認証ラベルが掲載され、日常生活でも目にする機会が多くなりました。

30周年を迎えたFSCと今後とも連携を深め、FSC認証の価値を広める取り組みを通じて認知向上を目指します。私たちは、引き続き責任ある資源調達と環境保全に努め、共に持続可能な未来の実現に貢献していきます。

日本テトラパック株式会社
サステナビリティ ディレクター
大森悠子さん

日本市場とオーストラリア・ニュージーランドにおけるFSCの役割

FSCオーストラリア・ニュージーランド 事務局長　メラニー・ロバートソン

■オーストラリアのFSC認証林と日本のつながり

FSC認証は、2000年代初頭にオーストラリア・ニュージーランドに導入されて以来、着実に広がってきました。持続可能な製品に対する消費者の需要の高まりとともに、FSCは、この地域における持続可能な林業の未来を形作る上で重要な役割を果たしています。

現在、オーストラリアとニュージーランドでは220万ヘクタール以上の森林が認証されていますが、FSC認証普及の主要な原動力となっているのは、日本の製紙業界からのFSC認証材の需要です。オーストラリア南部には日本向けパルプ用材を生産する多くの人工林が管理されており、その多くはFSC認証を取得しています。

オーストラリア最大級の木質繊維加工・輸出業者であるミッドウェイ社もその一つです。ミッドウェイ社は1986年に日本との取引を開始し、2011年にはFSC認証を取得、現在は4つの州にまたがる5つの施設で生重量で年間400万トンを超える木材チップ等を生産し、その大部分を東アジアの市場に輸出しています。「FSCは、持続可能な森林管理に対する我々の継続的な取り組みを実証し、サプライチェーン全体で持続可能性を推進する原動力にもなっています。」とミッドウェイ社のCEO、トニー・マッケナ氏は述べています。

オーストラリア・ニュージーランドの認証林が日本の認証紙市場を支える一方、日本は、FSC認証を通し両国において林業の持続可能性を高めるのに大変重要な役割を果たしているのです。

©Midway Ltd.

■独特な環境・社会問題とFSCの役割

オーストラリアとニュージーランドは、オーストラリア北部の熱帯雨林から、中央部の乾燥地帯、タスマニアの原生林まで、世界に類を見ないほど多様な生態系を有し、早くから他の大陸から切り離され独自の進化を遂げた、世界の他の場所にはない固有の動植物の宝庫となっています。しかし、これらの生態系は開発の危機に晒されています。

木材の効率的生産を求める市場との狭間で、FSCは、生態系保全と社会的な責任、そして経済利用のバランスを取る透明で民主的な枠組みを提供しており、認証林は生態系が保たれ、森林の社会的な役割も果たされるよう管理されています。

オーストラリア、ニュージーランドはまた、古くから先住民族が自然と共生してきた土地でもあります。FSC認証では先住民族の権利の尊重が原則の1つとなっていますが、彼らの声をFSCの目指す森林管理に確実に反映するため、オーストラリアでは国内規格策定に先立ち、2015年に先住民族作業部会が設立されました。このグループは、オーストラリアの国内規格策定に大きな役割を果たし、2018年には多くの利害関係者の声が反映された国内規格が完成しました。ニュージーランドでも、先住民族グループを含む社会、経済、環境のステークホルダーとの広範な協議を経て、2023年には国内森林管理規格が完成しています。

これらの規格に従い、オーストラリア・ニュージーランド両国のFSC認証取得者は先住民族コミュニティと緊密に連携しながら森林を管理しています。失われた先住民族の火入れをその先住民族の子孫とともに学び、生態系保全の手法として導入した例もあります。

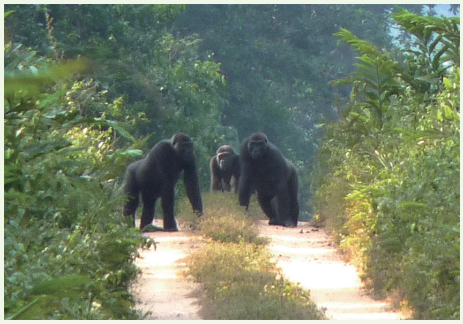
気候変動により環境リスクが高まる中、森林生態系の回復力と健全性を高める持続可能な管理の役割がこれまで以上に期待されています。オーストラリア・ニュージーランドでは、特に干ばつ等の異常気象や森林火災のリスクが危惧されており、将来にわたって健全で回復力の高い森林が維持されるよう、責任ある森林管理を主導するFSCの役割がこれまで以上に重要になっています。

FSC認証がアフリカ熱帯林と先住民族に果たす偉大な役割
～コンゴ共和国の事例より

FSCジャパン事務局長　西原智昭

■林業区で観察される驚愕の野生動物

「あ、ゴリラだ！」木材搬出路を渡るゴリラのグループを見つけた助手席に座る先住民は遠く指をさす。遥か向こうに、その黒くて大きな動物の群れが道路を横断している**(写真1)**。



（写真1）

未舗装の木材搬出路で野生動物の観察は珍しいことではない。日中の時間帯でもある。ゴリラだけではない。ときにはマルミミゾウやチンパンジー、ダイカー、バッファローなど枚挙にいとまがない。ボンゴという希少動物も見られる。森の中でもめったに見られないヒョウを直接肉眼で見られるのは驚きというほかない。コンゴ共和国での事例である。

林業区の道路上で野生動物が日常的に見られることは初めのうちは信じがたいことであった。伐採により森林を構成する植物は荒らされ森林そのものは甚大な被害を受ける。またその森林地帯に林業のために突如入植してきた数多くの労働者とその家族に必要な伝統的タンパク源は野生の獣肉である。木材搬出路は獣肉需要に基づいたハンターへの安易なアクセスにもなり野生動物への過剰な狩猟を加速化する。そうした状況では森林に棲んでいた野生動物が生き残れる可能性は低い。

筆者がFSC認証を持つ林業事業者の内実を現場で知るようになったのは10年以上前で、長年関わってきたコンゴ共和国の国立公園に隣接する林業事業者がその認証を取得して以来のことである。運転中に野生動物を日常的に見られるようになった地域はまさにFSC認証の伐採区に他ならなかった。その伐採区を超え、FSC認証を保有していない隣接する別の林業区も運転することもあったが、そこでは運転中に野生動物を見ることは極めて稀で、道路上に動物の糞や足跡もほとんどない。

■森林の自然回復を目指したFSC認証事業区

森林保全が大事だと言うと、植林すればいいと主張する人が少なくない。しかし熱帯地域ではごく限られた樹種を除いて植林が困難なのである。一度崩壊した複雑な熱帯林生態系で単純に同一種の植物の更新は望めず、実際多くの林業事業者が有用材の植林を試みているが成功していない。したがってアフリカの熱帯林において伐採をするとなると対象は人工林ではなく原生林となる。その原生の森を伐採したのち森は二次林として一見回復したかのように見えるが、二次林の生物多様性は低い。それが原生林に戻るには相当の年月を要する。肝心なのは、原生林における伐採においていかにダメージを最小限にするか、またいかに効率よく原生林への自然回復を目指すかにある。そこにFSC認証の役割が問われる。

FSC認証取得の大原則は「環境・社会・経済」への貢献にある。第一に、環境配慮を前提とした経済活動としての「計画伐採」が求められる。たとえば、1) 有用材として伐採する樹種を限定する；2) 伐採対象の樹木の最小直径を規定する；3) 林業区全体を分割し当該期間は一つの分割域のみを伐採区と規定、他の区域は伐採しない；4) 一つの伐採区においては数kmごとに格子を作り、その格子状の線上にのみある有用材を伐採し線上外では伐採しない；5) 伐採対象となった樹木の位置情報から樹種、直径、その樹木由来の製材に至るまでデータベースがあり全過程の透明性が確保されていることなどがある。

（写真2）

結果的に多くの樹種が切られずに残り生物多様性の維持に貢献できる。しかし伐採樹木の数や伐採面積を最小限にしても、伐採林を原生林の状態に迅速に回復させる必要性が残る。そこで重要となるのは2番目の「環境」配慮としての林業区内に生息する野生動物の保全である。野生動物への違法行為を防ぎ健全な頭数を維持できれば森林回復は効率よくなる。たとえばマルミミゾウの種子散布による効率的な次世代植

（写真3）

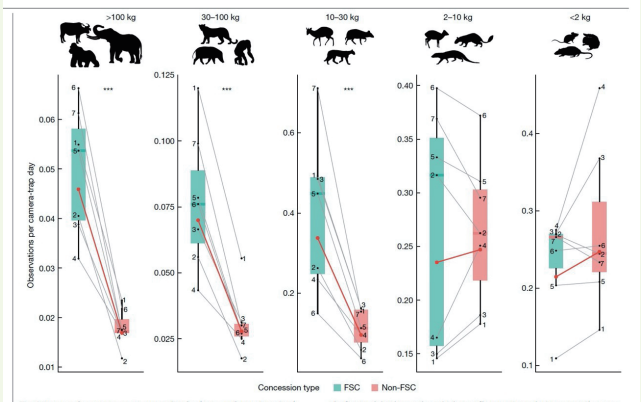


Fig. 3 | Mammal encounter rate across five body mass classes in paired FSC-certified and non-FSC concessions. Numbers represent paired FSC-certified ($n = 7$) and non-FSC ($n = 7$) concessions, red lines represent linear mixed model predicted fixed effects (certification status) and grey lines represent random effects (concession pairs). Data are represented as boxplots, where central lines represent medians and lower and upper lines correspond to the first and third quartiles, whiskers reflect 1.5 times the interquartile range. Pairwise comparisons were multivariate *t* adjusted. ***$P < 0.001$. Exact *P* values are summarized in Extended Data Table 3. Note that the scales of the y axes vary. Silhouettes of *Gorilla gorilla*, *Syncerus caffer*, *Potamochoerus porcus*, *Cephalophus* sp., *Hyemoschus aquaticus*, *Philantomba monticola*, *Atherurus africanus* and mice were created by T. Markus.

（図1） 観察された小型哺乳類の数は、FSC認証林と非FSC認証林とで同程度でした。大型哺乳類は通常、密猟や狩猟によって最初に姿を消す種であるため、持続可能ではない後者の森林管理地域では生物多様性が減少している。

物の芽生え**（写真2）**こそが、植林の難しい熱帯林において森林の自然回復に大きく貢献する。これには、絶滅危惧種で保護種に指定されたマルミミゾウ**（写真3）**を法律のもと保護する必要がある。密猟などの違法行為の取締権限は森林警察にあるが、コンゴ共和国のように国家予算が乏しい国では林業事業者の資金サポートで森林警察の必要経費や装備を補填する。また伐採会社が作った森の中の木材搬出道路にいくつか検問所を作り、その道路を通過するすべての車、バイク、人間などをチェックすることで野生動物に関わる違法物（たとえば違法のブッシュミートや象牙など）と密猟者・密輸者を取り締まる。これこそがFSC認証を持つ伐採区では日常的に野生動物を見ることができる理由なのである。

こうした絶滅危惧種を含む大型哺乳類の生息数がFSC認証林業区でそうでない林業区よりも優位に多いということを傍証する論文が発表された（Nature, 2024）。FSC認証林は大型哺乳類にとって安全な生息地であることを証明したものである。この研究ではカメラトラップを戦略的に配置し調査し、個々の動物を丁寧に数えることで非FSC認証林と比較、FSC認証のコンセッション（林業区）では明らかに大型哺乳類が多く生息しており、ゴリラや森林ゾウなど体重100kgを超える哺乳類では2.7倍、ヒョウやチンパンジーなど体重30 ～ 100kgの哺乳類では2.5倍生息していることが確認された**（図1）**。さらに、FSC認証林業区内で観察された大型哺乳類の遭遇率は、コンゴ盆地地域で最近モニタリングされた保護地域の公表データと同程度であることもわかった。

■FSC認証林業事業者による卓越した社会的配慮

FSC認証が求める第3の条件は社会配慮である。先のコンゴ共和国の事例では、労働時に必須の安全装備の提供だけでなく、労働者の生活への配慮として住居の建設、飲料水の提供、大型発電機による必要な最小限の電力の供給などである。小規模の市場や商店の場も設置し、労働者は日常生活に欠かせない食料や物資を入手できる。

注目すべきは外部から持ち込む鶏肉や牛肉、魚などを冷凍食品として通常よりも安価で提供することである。アフリカ熱帯林周辺の地域住民の主要タンパク源は伝統的に野生動物の肉であり、大勢の労働者が森の中に入れば野生動物が過剰に狩猟されてしまう。FSC認証の第2の条件で紹介された「野生生物保全」のためには合法的な狩猟以外の狩猟を防止するためにも、こうした代替タンパク源の供給が必要となる。

（写真4）

森の中に移住してきた労働者や家族のための医療クリニックの設置や薬の提供も欠かせない。子どもたちのための学校も作り、医者や教師は林業事業者の責任で雇われる。そして、こうしたインフラは労働者以外の地域の住民にも利用が開放されており、FSC認証がいかに地域全体に貢献しているかがわかる。

もうひとつ忘れてはならないのは、長大な年月に渡り熱帯林に依拠してそこに居住してきた先住民族への社会的配慮である。“ピグミー”（注）**（写真4）**と呼ばれるアフリカ熱帯林の先住民族は「森林消失」「定住化政策」「貨幣経済の浸透」「近代教育の普及」などにより、狩猟採集という従来の森の中での生業活動とそれに必要な森に関する＜伝統知＞や、長年受け継がれてきた平等主義原則に基づいた社会形態が継承されなくなってきている。独自の言語を喪失する日も遠くない。

彼らの住む森の消失は林業事業者としての責任は重い。原生林の自然回復は可能になっても、先住民族の文化や言語は一度破壊されればもとに戻らないからである。すでに政府の方針により森から出て周辺の農耕民の村に定住化するピグミーに対し、特定の森の産物が採集できる時期には林業事業者独自の移動手段を提供し森林への移動と一定期間の森での居住を可能としている。これにより＜伝統知＞を可能な限り継承できるようにしている。

また労働者や地域住民に開かれた学校には農耕民の子どもだけでなく先住民の子どもも通学する。しかし差別という歴史的な背景から先住民の子どもはいじめられる。そうした状況を回避するために、基本的な教育を実施しながら特別なカリキュラムを組む先住民専用の学校を作り、そこでは言語の継承も保証され、また季節に応じた森での活動期間は学校を休業することで子どもも大人から森の＜伝統知＞を森の中の現場で学ぶ機会を無償で提供される。

【参考文献】

西原智昭　『コンゴ共和国 マルミミゾウとホタルの行き交う森から【増補改訂版】』現代書簡 2020年3月
西原智昭　「野生生物保全の世界⑤ FSC認証時代が始まっている（1）コンゴ共和国の熱帯林保全」pp.66-69 現代の理論 2020年7月夏号
西原智昭　「野生生物保全の世界⑥ FSC認証時代が始まっている（2）コンゴ共和国の熱帯林保全」pp.48-49 現代の理論 2020年10月秋号
Joeri A. Z. et al. (2024) FSC-certified forest management benefits large mammals compared to non-FSC, Nature

注：「ピグミー」というのはかつてヨーロッパ人がアフリカ大陸に入植したとき以来「背が低い人々」のことを意味する蔑称であったが、現在はアフリカ・コンゴ盆地の熱帯林各地域により「…族」という形で集団名が付される狩猟採集民族である。ただ彼ら自身も長年総称として自ら「ピグミー」と呼ぶ習慣があり、ここでは彼らの総称として限定的に使用させていただく。

多様化するFSC認証

木材から始まったFSC認証は、紙、建築、非木材林産物、天然ゴム、ビスコース（繊維）、そして生態系サービス等の効果検証と、どんどんその境地を広げていっています。新しい時代の需要や技術開発によりFSCは進化し続けています。

FSC認証のエッセンシャルオイル
北海道下川町のトドマツの枝葉が原料
（株式会社フプの森）

FSC認証の紙ボトル

FSC認証の食品パッケージ

FSC認証のほだ木を使って栽培されたしいたけ
（宮崎県諸塚村）

生態系サービス等の効果検証

FM認証に任意で追加することができる、炭素隔離・貯留、生物多様性保全、水源涵養、土壌保全、レクリエーションにおける効果を検証するサービスが始まっています。

※日本においてはまだ事例はなく、写真はイメージです。

©FSC / Bin Jing

FSC認証タイヤ
FSC認証天然ゴムを使用したタイヤが
2021年に初めて採用

© FSC / Original Short Wellington Boots (Hunter Boots).

FSC認証天然ゴムを使用したブーツ

© FSC / All clothing and wood hangers a re certified

**認証ビスコースを使用した
FSC認証の衣料品**

©FSC / Trevor Armel

FSCリサイクルラベル付き木製品
ビーチにあるレストランのバーカウンター
（バリ、インドネシア）

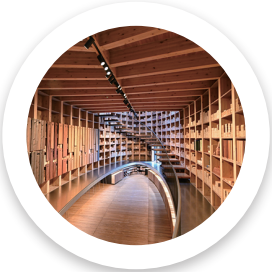
© FSC COMMS/ Ben Beech

FSC認証太鼓
希少な銘木や大径木ではなく、普通の木材を
使って太鼓を作り、持続可能な資源を使って
伝統を支えていこうという取り組み
（宮本卯之助商店・日本）

© FSCジャパン

FSCプロジェクト認証
写真はゼネコン本社を対象とした国内初
のプロジェクト認証となる戸田建設株式
会社新本社ビル。特別応接室天井トラスや
役員廊下等4か所に認証木材を使用

全体プロジェクト認証のショールーム



**株式会社マルホン
販売促進部
ショールーム運営
グループリーダー
中村利恵子さん**

マルホンは2006年にFSCのCoC認証を取得し、天竜スギ、尾鷲ヒノキなどのFSC認証商品を開発してきました。2019年に福岡市で新たなショールームをオープンするにあたり、商品に留まらずショールーム自体についてもFSC認証を取得する「プロジェクト認証」に九州で初めてチャレンジしました。柱と外壁に使用した天竜スギ、床と天井に使用したヨーロピアンオークなど、建築に必要な木に由来する製品すべてを当社で調達しましたが、石膏ボードなど通常当社での取り扱いのない商品は、メーカーを全国から探しました。必要となるすべての材を認証材で調達する物理的な面と、プロジェクト認証取得に対するチャレンジの姿勢を関係先にご理解していただく心理的な面に苦労しました。FSC認証制度は山側のFM認証が世界的に一元的な規格として設定されていたり、認証取得後の規格運用についても厳しく監査がなされたりと、信頼性が高いと思います。

未来へ

Think globally Act locally

森町森林組合 森林計画課長　**村山英人さん**

森町森林組合は2016年、静岡県と森町、掛川市、両市町の森林組合の5者で遠州森林認証グループを組織し、FM認証を取得しました。認証取得により、「良い山」の概念が変わり、現在は「多様性がある山」を目指して管理しています。

我々グループの取り組みで特にユニークなのが電動アシスト付きマウンテンバイク（EMTB）で認証林をめぐりながら林業を知っていただくツアーです。このツアーをきっかけに知り合った外部のMTB愛好家の方々と組合長が森でマウンテンバイクを楽しむためのクラブを立ち上げ、広葉樹林内に、自分たちで専用コースを作るに至りました。今ではそれが発展し、マウンテンバイクのパークとして国内の愛好者の間ではかなり有名なコースになっています。FSC認証をきっかけに人と人とがつながり、それが活力になってまた新たな取り組みが生まれ、人の輪が広がっています。林業は地域の活動ですが、世界の環境保全にも役立っています。地域とグローバルな視点両方から総合的な森の価値や魅力を伝えるツールとしてFSC認証に期待しています。

体験で広げる健やかな未来への取り組み

株式会社エコ建築考房
代表取締役社長
喜多茂樹さん

当社では以前から自然素材を使った健やかな家づくりにこだわってきました。健康で安心に住める家を追求した結果、化学物質が含まれる合板や集成材などの新建材は使用せず、無垢材、それも、体に良い天然成分が失われないよう低温乾燥させた木材を使っています。FSC認証を始めたのは住む人だけではなく環境にも良い木材をと考えた結果でした。

2019年に初めてモデルハウスでプロジェクト認証を取得し、それから主に店舗で数件プロジェクト認証に取り組みました。SDGsの要素を含んだFSC認証は企業のお客様に好評です。継続的に認証材を使っていくため、原産地である岐阜県東白川村や関係事業者の皆様と認証材推進協定も結び、2023年には継続的にプロジェクト認証物件が建てられる連続プロジェクト認証も取得しました。

私たちの取り組みはWWFジャパンさんからも応援いただき、業界でも注目されるようになりました。しかし認証だけで売れるかというとそうではありません。私たちは健やかな建物や遊び、認証林へのツアーといった体験を通して環境問題やFSCを肌で感じ、知ってもらい、楽しみながら共感の輪を広げていきたいと考えています。

©FSC/Ben Beech

▲FSC部分プロジェクト認証を取得した子どもの遊び場、つなぐの森ハリプー。全体に岐阜県東白川村の無垢材が使われ、認証材は構造材やシンボルに使われている。

©Million Petal Bike Park

©Million Petal Bike Park

ネイチャーポジティブを目指す時代のTNFDとFSC

WWFジャパン 金融グループ長 **橋本務太さん**

生物多様性保全を目指す世界の動き

急速に失われつつある生物多様性の流れを止めるため、今、「ネイチャーポジティブ」、則ち自然の損失を止め、さらには反転させることの実現が求められています。2022年に行われた生物多様性条約締約国会議（COP15）で採択された「昆明・モントリオール生物多様性枠組」においても、このネイチャーポジティブを2030年までに実現することが目標として掲げられました。

ここで重要となるのが民間の役割です。WWFも関与して設立されたTNFD（Taskforce on Nature-related Financial Disclosures）では、2023年9月、企業が自社事業やバリューチェーンを通じて自然にどのように依存し、影響を与えているかを評価し、それに基づくリスクと機会を適切に認識・報告するための枠組みを公開しました。こうした情報が公開され、金融機関からの評価につながることで、企業経営および資金の流れがネイチャーポジティブに向かうことが期待されています。

TNFDで高まるFSCのポテンシャル

木材や紙製品を扱う事業者にとって、原産地を含むバリューチェーンの理解はTNFD開示の基本となります。TNFDは取り扱い製品や原産地の認証の有無に留まらず、原産地の森林の自然環境やリスク管理に関する詳細なデータに焦点を当てます。企業は、バリューチェーンの起点である森林まで遡り、地域ごとに異なる生物多様性や自然関連リスクを理解し、リスクが発現した際の財務影響や環境影響を適切に開示することが期待されます。

FSCのFM認証を取得・維持するためには、計画的な森林管理を実施し、その過程で希少種や水質モニタリングなど、さまざまな自然環境に関するデータを収集する必要があります。これらの情報は、TNFD開示を行う企業にとって自然関連リスクや機会を評価する際の貴重なデータとなります。これまでは主に認証審査に活用されていた情報が、TNFDで企業の競争力や信頼性の向上に寄与する可能性が高まっています。

サプライチェーン川下の企業は取り扱う製品の原産地まで遡り、情報を収集することが求められる一方で、森林管理者はこれまで聞かれたことのない問い合わせに対応することになるかもしれません。従来認証で十分にカバーされていない部分は今後対応が必要ですが、WWFジャパンと南三陸森林管理協議会の共同調査（※1）によると、宮城県南三陸町のFSC認証林にはTNFD開示に有用な自然に関する情報が相当程度揃っており、TNFDに対するFSC認証の親和性が示されました。他のFSC認証林においても同様の結果が期待されます。

今後企業は、引き続き製品のFSCマークにより森林保全への貢献を訴求しつつ、認証材の価値を「認証」にとどめず、具体的なネイチャーポジティブへの貢献を明確にすることが重要となります。FSC認証林の価値がTNFDにより評価されることにより、企業が適切な森林管理を持続可能な事業活動の一環として支えていくことが期待されています。

（※1）https://www.wwf.or.jp/activities/data/20230830forest.pdf

未来へ

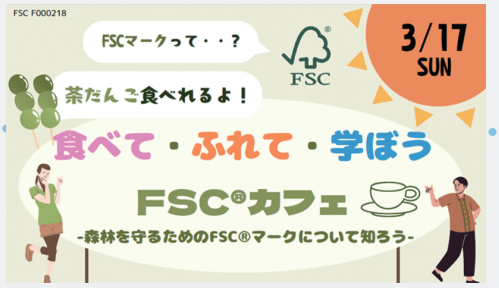
自分の考えを見つめ直すきっかけに

高校でSDGsの授業を受講しました。森林の現状を知り、未来がどうなってしまうのかと思いました。先生からジュニア・アンバサダーのことを聞き、友人の木田さんに声をかけてアワードに応募しました。団子や焼き鳥の串にFSC認証材を使うという、京都らしい提案をしました。受賞した時は私たち高校生の思いが響いたと感じ、アンバサダーになったことにわくわくしました。実際にFSC認証材を使った商品開発では、何回もミーティングを重ね、非常に苦労しましたが、オリジナル製品を開発することができました。この経験を通じて私たちは大きな達成感を得ることができました。アンバサダーの活動を通じて、森林保全の見え方が変わりました。周りの学生はFSCのマークを見たことがあるけれど、その意味を知っている人は少ないので、もっと多くの人にFSCについて知ってもらいたいと思っています。2024年夏、米国の大学に短期留学して環境問題について学びました。環境配慮ビジネスなどを学び、自分の考えを見つめ直す機会になりました。

FSCジュニア・アンバサダー
上田桃加さん

FSC ジュニア・アンバサダー

立命館大学学生の上田桃加さん、木田陽梨さんは立命館高校生だった2023年、
「FSCアワード」の最優秀賞を受賞して、FSCジュニア・アンバサダーを1年間務めました。



FSC製品が身近なものになれば…

FSCアワードに応募するからには、アンバサダーになるという決意をして最終選考会に臨みましたが、実際受賞した時には信じられない気持ちでした。3月に実施した京都府宇治市でのワークショップは、自分たちの理想とする形となり、大きな達成感を得ることができました。また、2人で製品化したFSC認証材を使った串、串入れを団子屋さん、焼き鳥屋さんに交渉し、使ってもらうこともできました。学生が活動することで、FSCに関心を持ってくれたり、温かいコメントをもらえたりもしたので、1年間頑張って良かったという、嬉しい気持ちで一杯でした。環境問題を共通認識にしていきたい。FSCについての知識があれば、お店に行った時にFSCのマークがあるものを買うという行動につながります。知識があるから選択できるので、FSCをより多くの人に知ってもらいたいと思っています。

FSCジュニア・アンバサダー
木田陽梨さん

To the Future

海外赴任から故郷の九州に帰ってきた時、私は九州の森の豊かさに改めて気付かされました。三井物産は日本全国に約4万5000ヘクタールの山林を持っており、その全てでFSC認証を取得しています。当社と同じく社有林をもち、FSC認証にも積極的に取り組む九州電力様とお話したところ、FSC認証や森の恵みを日本の山林の経済性に如何に活かせるか、共通の課題認識を持っていることが分かり、皆で打開策を考えるためのワークショップ開催に至りました。

FSC認証を受けるということは、生物多様性保全、持続可能性を担保して森林を管理しているということで、環境に対する責任をしっかりと認識しているという企業メッセージになります。海外で普及しているFSCを日本でも認知度を上げ、経済合理性に結びつける施策について、山側からサプライチェーンの川下、更には他業種まで多様な方々がワークショップに意見を持ち寄りました。今回の成果を梃子にして、FSCが経済合理性につながり、しっかりと森林を保てる持続可能な仕組みとなることを期待しています。

三井物産株式会社
九州支社 業務部 事業開発室 次長
音成謙一郎さん

FSCの価値を高めるためのアイデア創出ワークショップ

2024年1月～ 6月、三井物産と九州電力主催で、FSC認証の価値を高め普及していくためのアイデアを出し、アクションプランを練るワークショップが全国5都市で6回にわたり開催されました。全6回を通じて、オンライン・対面で143名の幅広いステークホルダーがFSCについての課題を共有し、様々な角度から熱く語り合い、意見を出し合いました。

当社の社有林がFSC認証を取得してから20年近くになります。国内に放置林が多い中、当社は育林も伐採も継続的に行っており、未来に持続できるような管理を行っていることを適正に審査してくれるのがFSCであると考えています。この取り組みを継続していきたいと考える一方、認証取得によるメリットがあまり感じられないというのが実情です。それをなんとかしたいという思いからこのワークショップを企画し、お蔭様で第６回には100人を超える方にご参加いただきました。

このワークショップを通じて感じたのは、FSCに共感しその価値を認め、それを広めていこうという熱い思いを持たれている方がこれだけいらっしゃるということです。このワークショップでは様々な業種の方が集い、FSCが正当に評価され、それをツールとして日本の山が潤う未来の実現に向け、膝を突き合わせて真剣に議論しました。ここでできた人のつながり、企業のつながりが今後、道を開くきっかけになると感じています。

九州電力株式会社
ビジネスソリューション統括本部
業務本部 管財センター管財設備グループ長
本谷覚さん

未来への提言

FSCジャパンの願い

私たちが使っている木製品の原料となった樹木が森で成長していたとき、たとえその森が人工林であったとしても、樹木は森の一員として多様なはたらきを発揮していました。すなわち森林は原木を供給するためだけに成長していたのではなく、土砂災害の防止や水源の涵養など「多面的機能」と呼ばれる多くの機能を発揮しながら成長していたのです。私たち人類が持続可能な社会を維持していくために不可欠な生物多様性の保全や気候の安定も森林の多面的機能の一部です。

さらに、化石燃料の大量消費による地球温暖化が進む中で早くから森林による二酸化炭素の吸収や木製品の利用による炭素の貯蔵機能が注目され、林業・木材産業界はこの機能を重視して木材の利用促進を呼びかけています。

しかし上述した森林の多面的機能全体を考えると、この場合も原木を供給している森林の適切な管理が不可欠です。例えば違法伐採材と称されるものについては、その材が伐採された地域で森林の多面的機能が軽視されている場合が多いと言われています。つまり適切で持続可能な管理が行われている森から供給された木材に限り、木材は使えば使うほど人類の未来に貢献することになるのです。

FSCの森林認証制度はそのような適切な森林管理を推進する分かり易い方法であり、世界の消費者に認められている制度です。しかも認証林で行われている毎年の監査を受け続けることによってPDCAが繰り返され、管理されている森林はより豊かでかつ人々の役に立つ森になっていくのです。しかし国内の認証林は現在限られており、そこからのサプライチェーンや実際に使われる認証材も限られています。今後は国内認証材の需要を高め、第三者により世界水準でチェックされる責任ある森林管理が日本の森林にも広まり、日本の林業が活性化することを期待します。

FSCジャパンはカーボンニュートラルとネイチャーポジティブが必須の目標となった現代社会において、持続可能で適切な森林管理の推進をお手伝いする役割をこれからも積極的に担いたいと思っています。

太田猛彦
FSCジャパン代表

つながる想い、広がる未来

FSC30 周年記念誌をお手に取っていただき、誠にありがとうございます。

この記念誌では、FSC 認証という制度の発展とともに、森林保全や持続可能な社会というビジョンを共有し、FSC の発展を様々な立場で支えてきた皆様の活動の軌跡を振り返りました。日頃、FSC のスタッフとして、多くの立場から FSC 認証に関わる方々とお話しし、その熱い思いに触れる中で、皆様の取り組みやストーリー、想いを多くの方に届けたいと常に考えておりました。そのため今回、記念誌という形で限られた数ではありますが、各地で活躍する皆様にスポットを当てられたことを大変嬉しく思う次第です。また、早くから FSC に取り組み、その後の発展を牽引して来られた方々の高齢化や世代交代が進む中で、そうした先輩方のお話を直接伺えるまたとない機会となり、ご活躍や功績を記録に残せたこともとても幸せに思います。

しかし、時間も限られる中、誌面に取り上げる団体や取り組みを決めることは容易ではありませんでした。初期に活躍されその後の発展の礎となった方、地方で継続的に尽力されている団体、ユニークな新しい取り組み、業界を牽引する企業の影響力のある活動―それぞれに素晴らしい中、業種、規模、地理的分布、取り組み内容等のバランスを考慮し、誌面の許す限りご紹介させていただきました。取材や寄稿にご協力いただいた皆様のおかげで何とか形にまとめることができました。心より御礼申し上げます。

記念誌作成を通じて、私たちも FSC 設立の経緯やその存在価値・意義を改めて見直すとともに、FSC の存在がどれだけ多くの幅広い人々に影響を与えているか改めて考えさせられました。また、多くの隠れたストーリーに出会い、この世界的な取り組みがいかに多くの人々の希望や熱意、期待、努力によって支えられているかを実感いたしました。

今、気候変動や生物多様性の損失という地球規模の危機の中で FSC の真価が問われています。これらの問題の前には個人は無力ですが、世界中の人が同じ目標を共有し足並みを揃えることで未来は開けるはずです。FSC は一人一人の努力を結び付け、大きなつながりを作るためのツールです。そして、これをお読みの皆様もまたその大きなつながりの一員です。FSC を通じて、責任ある森林管理ひいては持続可能な社会や地球環境の実現という目標に向かい取り組む同志であることに誇りを感じていただければ幸いです。

FSC に関わるすべての皆様と共に、これからも FSC の新しい歴史を刻んでいければと思います。

FSC ジャパンスタッフ一同

FSC30 周年記念誌
2024 年 11 月 29 日発行
発行　特定非営利活動法人日本森林管理協議会（FSC ジャパン）
〒 162-0023 東京都新宿区西新宿 7-4-4 武蔵ビル 5F
https://jp.fsc.org
編集　西原智昭、笹本なつ美、三柴ちさと、河野絵美佳、白井聡子

FSC®F000218

30
1994
2024

FSC